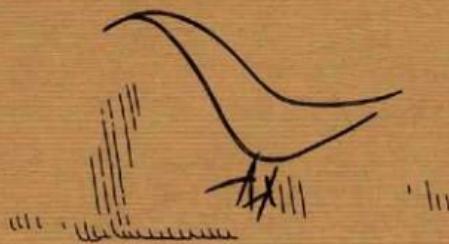


福岡市埋蔵文化財調査報告書 第290集

那珂遺跡4

— 那珂遺跡群第23次調査の報告 その2 —

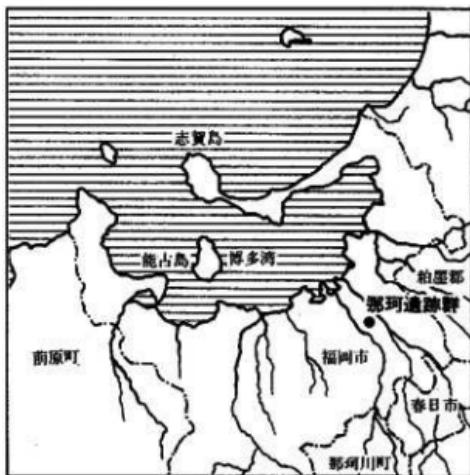


1992

福岡市教育委員会

那珂遺跡4

—那珂遺跡群第23次調査の報告 その2—



遺跡調査番号 8936

遺跡略号 NAK23

1992

福岡市教育委員会

序

福岡平野のほぼ中央部を南東から北西に延びる広大な那珂台地には、先人達の残した文化遺産が数多く分布しています。都心部に近いこの地域は開発が活発に行なわれているところであり、社会資本の整備が急務となっています。

このたび、都市計画道路竹下駅前線新設に際して、那珂保育所の移転が本格化し、移転先に当たる那珂遺跡群の一部を発掘調査いたしました。

調査の結果、弥生時代の環濠や銅戈の鉄型、古墳時代の集落跡、古墳時代終末の倉庫群、中世の集落跡など各時期の遺構・遺物が密度濃く発見されました。

本書は、これらの発掘調査の成果のうち、第2分冊として弥生時代の遺構群と古墳時代終末の倉庫群を中心収録したものです。

本書が、埋蔵文化財に対する市民の方々のご理解、さらには学術研究上役立つことができれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査から整理に至るまで本市民生局、土地開発公社をはじめ、多くの方々のご理解とご協力を賜わりましたことに対し、心より感謝の意を表します。

平成4年1月13日

福岡市教育委員会

教育長 井口雄哉

例　　言

- 本書は、吳生町那珂麻生所移転に伴い、土地開発公社の受託事業として認可を教育委員会が1989（平成元）年7月10日から1990（平成2）年1月4日における発掘調査を実施した、那珂流域の第23次緊急発掘調査の報告書である。
- 本書に収録した見送調査の記録は、第2分冊として先史時代の遺跡群と古墳時代終末の遺跡群を中心としたものである。古墳時代の4穴住居址、土壙、溝及び中世の遺跡群については第1分冊で既に報告（第24号）している。また、今回報告分の遺跡群についても既に第1分冊の方に収録しているので、詰合せでご覽なれば幸いである。なお、本報告では高級の墓出土、再び目次と回復目次を割愛している。また、遺物の量が膨大であったためできるだけ簡化に努めた。そのため遺物の個別説明が不充分である。機会をみて遺物図版を作成したいと考えている。
- 遺構の呼称は記号化し、竪穴住居址→SC、掘立柱建物→SB、井戸址→SE、土壙→SK、溝→SD、ビット→SPとした。なお、遺構番号は概略に開拓なく進捗とした。ただし、SPはSPだけで番号を付与している。
- 本書に収録した遺構圖面作成は、下村　智、荒牧宏行、上方高弘、大庭陽司、池田裕司が行った。現場写真は下村の他、上方高弘、安野　良、高田則子、吉村知子が行った。遺物写真は上方高弘による。なお、現文センターに提出した資料は、別センターの二宮・小畠氏に実測及び写真撮影のご協力を願った。
- 木書で沿うる遺構図の方針は全て北側である。また、レベル高は那珂小学校設置の日 -7.912m（地図測量高）から移動した。
- 那珂流域第23次調査に係る遺物・記録類（図面、写真、スライドなど）は、報告終了後福岡市埋蔵文化財センターへ収蔵、管理される予定である。
- 本書の執筆・編集は、下村・荒牧が行なった。

遺跡調査番号	8806	道路番号	SAK23
調査地地名	博多区竹下町丁目270-1外	分布地図番号	088-A-3
実測面積	2,000m ²	調査対象面積	2,000m ²
調査期間	1989年7月10日～1990年1月4日	報告書番号	I-1-3

本文 目 次

I 調査の記録	1
1 竪穴住居址	1
2 掘立柱建物	1
3 土壙	6
4 井戸址	8
5 溝	11
II おわりに	51

I 調査の記録

1 壺穴住居址

S C21(Fig. 1・2、PL第254集-7)

長方形プランの壺穴住居址である。主軸は略南北で、4.2mを測る。東西は3.5m、壁高は0.4mである。プランについては既に第254集で報告しているので、ここでは遺物について報告しておきたい。

Fig. 2-1はT字に近い口縁部を有する壺である。口径24.4cm、淡茶褐色を呈し、胎土は精良である。外面に刷毛目調整がみられる。2は口径34.2cmで、逆L字の口縁を持つ。口縁上面がやや丸味を帯びている。茶褐色を呈し、胎土に1~2mm大の石英・長石砂を少量含む。3はく字状口縁を持つ壺で、口径31.2cm。淡茶褐色を呈し、2~4mm大の石英・長石砂をわずかに含む。その他、圓化しなかったが、鋤先状口縁を有する広口壺、同じ鋤先状口縁を持つ高壺、口縁部に刻目を施し口縁下にM字突帯を持つ壺、器台、筒形器台など破片がみられた。壺・高壺・壺・筒形器台には丹塗りが施されていた。遺物の量は割と多く、弥生中期末の時期と考えておきたい。

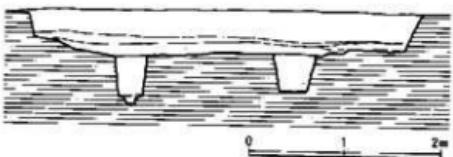
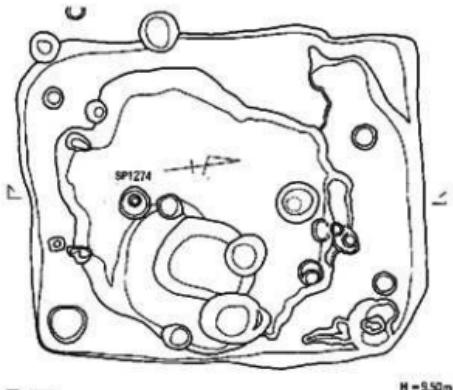


Fig.1 SC21遺構実測図(1/60)

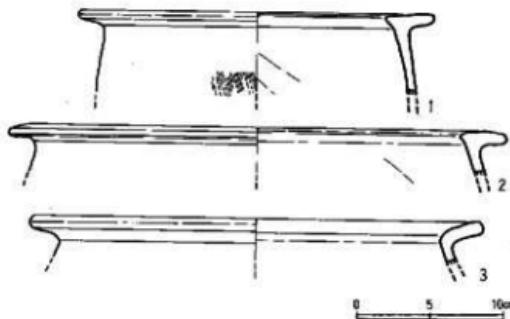


Fig.2 SC21出土遺物実測図(1/4)

2 掘立柱建物

S B57 (Fig. 4、PL第254集-16) 調査区北端部で検出した大型の掘立柱建物である。一部は調査区外に延びており、桁行は6間分までしか確認できていない。梁行5間、桁行8間の建物になると推定される。梁行総長7.3m、桁行は現存で10m、本来は13.5m程度と考えられる。柱穴の掘方は1m前後で、建物中心部に長径1.5mの大型柱穴を付設する。柱間隔は梁行が両端1.7m、中間は1.3m、桁行は1.5mから1.8mで少しバラつきがある。柱痕は側柱が径20~30cm、中心部が径40cmを測る。主軸はN5°Eでほぼ南北方向をとる。Fig. 4は柱穴から出土した遺物である。4~6は逆L字状口縁を持つ壺である。7は鋤先状口縁の壺片で、8・9は壺及び壺の底部である。10はS P1464から出土した鋳造鉄斧の中子ではないかと考えられる土製品である。大きさから青銅鋤先のものではなかろう。残存長6.9cm、最大幅4.2cm、最大厚1.5cmを測る。色調は暗灰褐色から淡灰褐色を呈し、胎土は金雲母を多く含む極めて精良なものである。カスツとした感じで割と軽く、2次的な火を受けて風化している。縦方向に1mm以下の細かい孔が數本あいており、鉄錆が巻いている。11は古銅輝石安山岩製の有茎石器である。茎と先端部の一部を欠失する。残存長3.7cmで、S P1488出土。S K126からの混入品である。弥生前期末から中期初頭の所産である。掘立柱建物の柱穴からは他にく字形口縁の壺、器台、直口壺や丹塗りの高杯、壺などが出土。建物は弥生中期末の時期と考えられる。

S B87・90・91 (Fig. 5~7、PL第254集-17~20) 調査区中央部南寄りに3棟連続して検出された建物群で、主軸はN78°Eにとり、磁北から12°西偏している。全体にかなり削平を受けていたが、3間×4間の純柱の建物であることが確認できた。S B87は梁行長4.8m、桁行長6.3mで、S B90・91も殆ど同じ規模である。S B87と90の間が2.6m、S B90と91の間が1.9mと間隔が狭い。重複が無く、柱筋が通ることから同時存在の可能性が高く、桁をつなげた並び倉ではないかと推測される。柱穴の掘方は0.8~1.0mで、柱痕は20cm程度である。遺物は各柱穴から出土した。Fig. 5~12はS P798から出土した須恵器の壺である。口径21.5cm、肩部にカキ目が残る。13は須恵器壺身である。口径11.1cm、立ち上がりは短く、内傾する。この他、S B87からは須恵器短頸壺・壺、土師器壺・壺、磁石などが出土している。Fig. 6~14はS B90のS P872から出土した須恵器壺身である。立ち上がりは長いが内傾している。口径12cm。時期的にやや古いので混入品か。その他、須恵器壺蓋・壺・壺、土師器壺・壺などが出土。S B91からは須恵器壺身・壺蓋・壺・壺・高杯、土師器壺・壺などが出土している。

S B102 (Fig. 8~10) S D44と方向を同じくする1間×2間の建物である。主軸はN54°Eで柱間隔が長く、梁行3m、桁行7.7mである。Fig. 10は柱穴から出土した中期末の土器。

S B103 (Fig. 9、PL第254集-20) 梁行、桁行4.6mで2間×2間。6世紀後半代。

S B104 (Fig. 11) 調査区北側に位置する1間×2間の建物である。主軸はN7°Eで、梁



Fig. 3 新河23次調査・遺構記載図 (1/200)

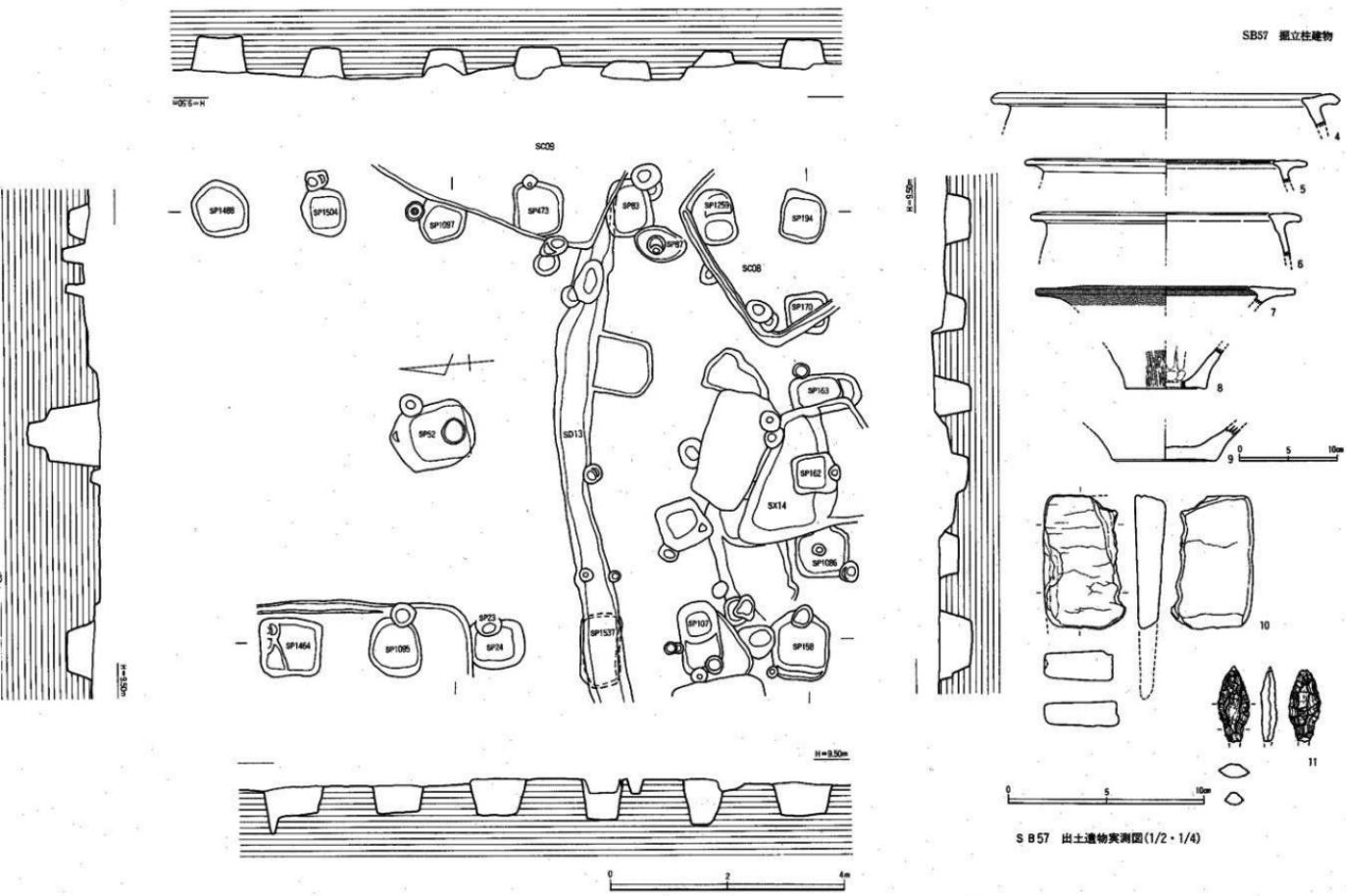
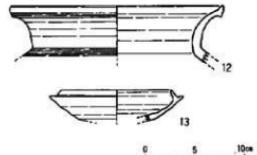


Fig.4 SB57 進構実測図(1/2・1/4)

SB57 出土遺物実測図(1/2・1/4)

SB87 掘立柱物



SB87 出土遺物実測図(1/4)

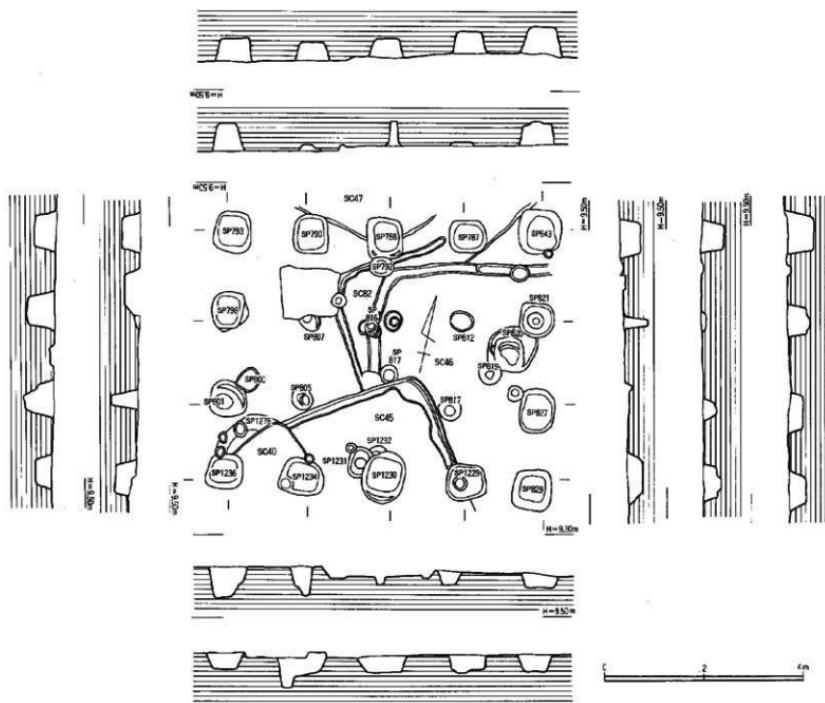


Fig.5 SB87 遺構実測図(1/80)

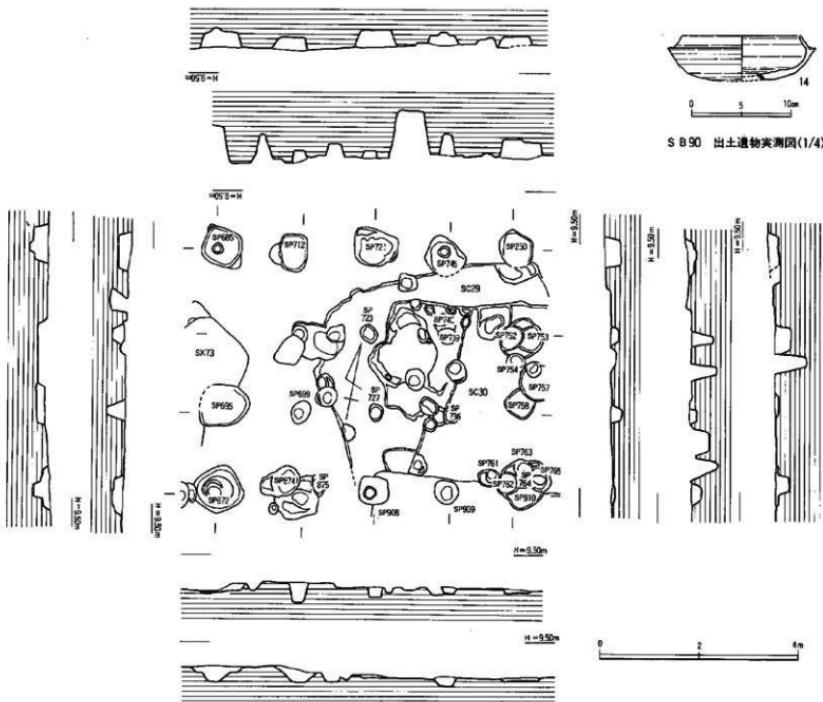


Fig.6 SB90 遺構実測図(1/80)

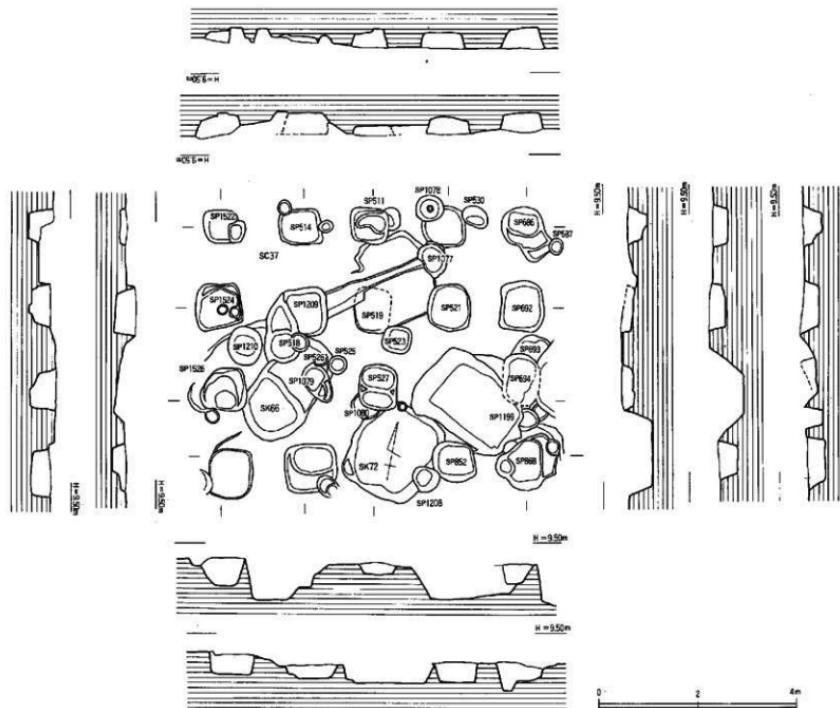


Fig.7 SB91 造構測図(1/80)

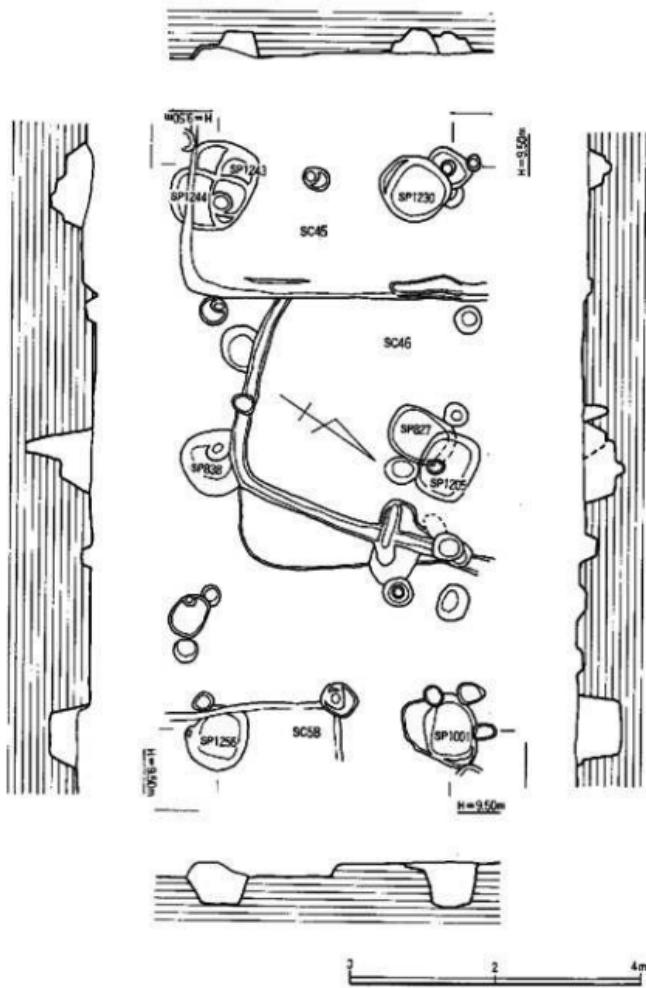


Fig.8 SB102遺構実測図(1/80)

行2.7m、桁行4.7mである。遺物は逆L字口縁の甕・高壺・筒形器台片などが出土している。

S B 123 (Fig.10+11) S B102に切られる1間×1間の建物である。主軸はN70'E。梁行2.7m、桁行4.2mでスパンが長い。Fig.10-20はS P820から出土した鉢形土器である。

SB103 振立柱建物

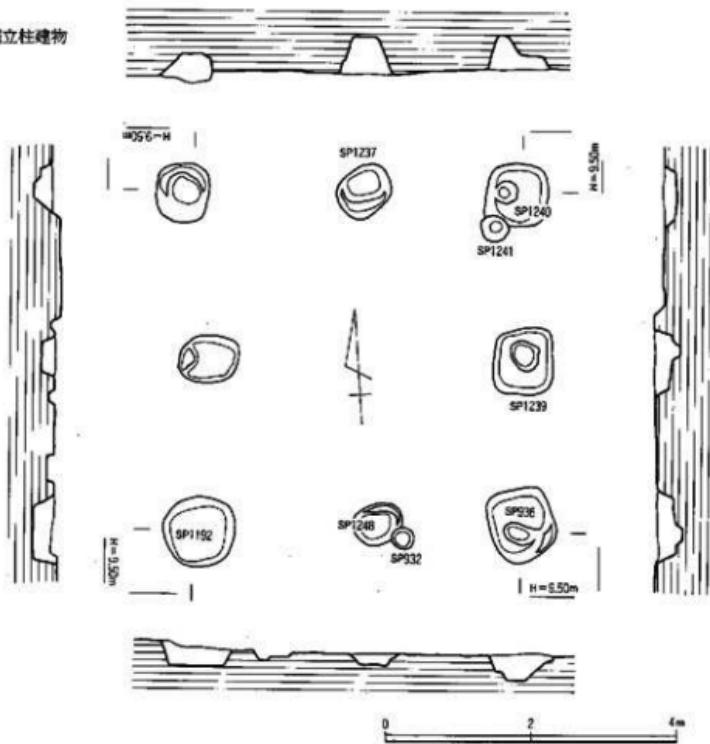


Fig.9 S B 103遺構実測図(1/80)

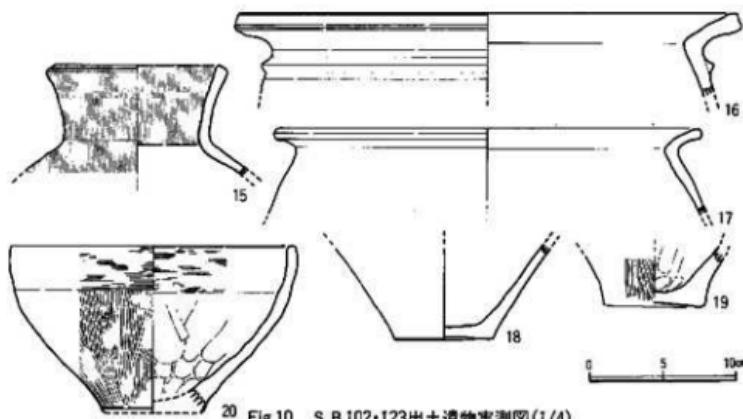


Fig.10 S B 102-123出土遺物実測図(1/4)

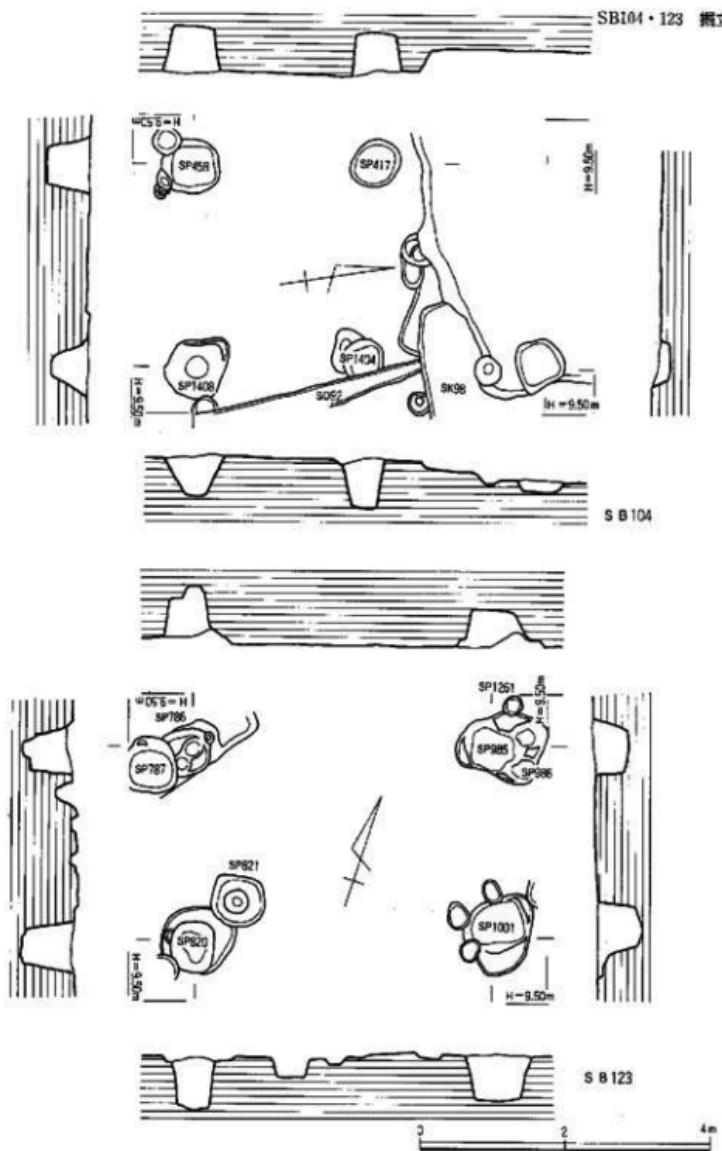


Fig.11 S B 104・123造構実測図(1/80)

3 土壌

S K19 (Fig.12、PL第254集-23) 調査区北端部で検出した袋状竪穴である。プラスコ状を呈し、確認面径1.9m、底径2.1～2.2m、深さ1.25mを測る。底面は平坦になっている。弥生前期末から中期初めの壺、壺の破片が出土している。同様の貯蔵穴と考えられる袋状竪穴はS K120とS K126があり、共に北端部に分布している。調査区北側は工場倉庫で削平されているが、本来は台地の縁辺部にあたり、袋状竪穴が群集して分布していたものと考えられる。

S K66 (Fig.12-13、PL第254集-25) 調査区南西部に分布する略長方形の竪穴である。北側は幾つもの柱穴に切られている。南側は1段深い。遺物は、広口壺、く字形に近い口縁部を有する壺、高坏、投弾などがある。Fig.13-21は投弾で、現存長3.8cm、最大径2.2cmである。淡茶褐色を呈し、砂粒少なく精良な胎土を持つ。S K66は出土遺物から弥生中期末と考える。

S K72 (Fig.12、PL第254集-25) S K66の東隣りに位置し、主軸の方向も同じである。長径1.9m、短径1.75mで略方形に近い。深さは0.55m残存していた。遺物は、鋤先状口縁を持つ広口壺、く字形に近い壺の口縁部、平底の壺底部、丹塗りの施された高坏や壺などが出土している。遺物から弥生中期末の時期と考えられる。

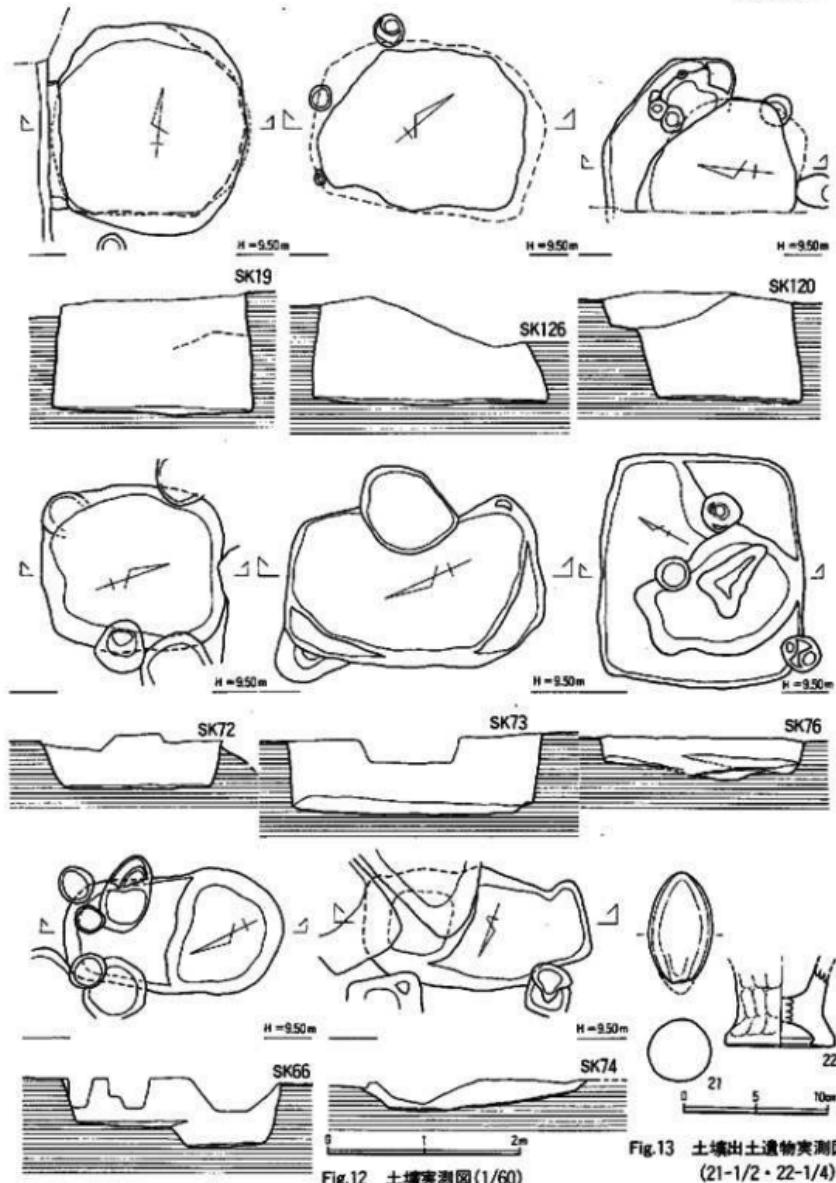
S K73 (Fig.12、PL第254集-26) S K72の更に東隣りに位置するやや大形の略長方形竪穴である。長辺2.7m、短辺1.6m、深さ0.8mを測る。周壁はほぼ垂直に立ち上がっている。出土遺物は多かったが破片が小さかったので図化していない。鋤先状口縁を持つ壺、逆L字状及びく字状の口縁部を有する壺、平底の壺底部、高坏、鉢などがある。丹塗りを施されたものに高坏、鋤先状口縁壺、無頸壺、壺蓋などがある。弥生中期後半から中期末にかけての遺物があり、所属時期は中期末と考えておきたい。S K66・72・73は方向を揃えて南西部に集中しており、南側に位置する大溝S D44と同じ時期である。土壌の分布域はさらに西側へ広がる可能性がある。

S K74 (Fig.12) 調査区北側のS B57と重複して分布している略長方形の土壌である。長さ2.3m、幅1.25m、深さ0.3mで、東側がやや深い。弥生中期後半～末の遺物が少量出土。

S K76 (Fig.12、PL第254集-2) S C01床面下から検出された土壌である。長さ2.4m、幅2.1mを測り、深さは最も深い所で0.4mである(再録)。遺物は逆L字又はT字に近い口縁を持つ壺形土器と壺の破片が出土している。弥生中期後半～末に属する土壌である。

S K120 (Fig.12、PL第254集-24) 北側に分布し、袋状を呈するが半分は攢乱で破壊されている。上面径1.5m、底面も1.5mである。肩部に一条の沈線を有する板付II式の壺、やや厚手の壺底部などが出土している。弥生前期末から中期初頭にかけての時期であろう。

S K126 (Fig.12-13、PL第254集-24) S B57の柱穴の下から検出されたやや精円形を呈する袋状竪穴である。底径2.4m。如意形口縁の壺、あげ底の壺底部 (Fig.13-22) 出土。



4 井戸址

S E 83 (Fig.14~16、PL 4、PL第254集-22) 調査区中央部南寄りで出土。S C 40と45住居址の重複した床面下で確認したものである。掘方径は確認面で1.4mを測り、断面は緩やかに窄まりながら下降し、途中で抉れて底径0.75mの井戸底に至る。途中の抉れ部は鳥栖ロームと八女粘土との境から始まり、最大1.25mに達している。井戸底までの深さは確認面から2.65mである。遺物はふたつのグループに分かれて出土し、確認面下0.5mの所と、井戸底からである。井戸底のものは数個体かたまって出土している。

Fig.15~23は下部から出土した壺である。口縁部を欠失するが頸部以下は残存している。頸部と肩部の境に三角突帯を貼付する。赤褐色を呈し、胴部最大径は18.3cmである。24はく字状の口縁を持つ壺で、口唇部は平坦に仕上げている。外面に粗い刷毛目調整が施される。口径16.2cm、器高21.1cmを測る。下部出土。25もく字状の口縁を有する壺である。外面に細かな刷毛目調整が施される。下部出土。26・27は下部から出土した短頸の壺である。26はナデ調整、27は粗い刷毛目が僅かに残る。28・29は鉢形の土器である。28は口径23cm、器高17.8~18.9cmを測る。黒褐色を呈し、外面にカーボンが付着している。29はやや厚手の器形で、大きめの砂粒を多く含む。28・29とも外面に粗い刷毛目調整が施される。30・31は小型の鉢形土器である。ともに赤褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。31は下部出土。32~34は器台である。32は上部から出土したもので、中位よりやや上方で窄まり、そのまま外反する。赤褐色を呈し、石英・長石砂を多く含む。33は小型で指痕が残る。褐色~黒褐色を呈する。34は上端部が強く外反するタイプである。褐色~赤褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。外面に刷毛目痕が残る。33・34は下部出土。35は上部から器台と共に出土した複合口縁の壺である。赤褐色を呈し、胎土は砂粒少なく精良である。外面に刷毛目痕が残る。36は大型の変形土器で、下部から出土した。長胴で頭部に丸味を持つ三角突帯、胴部に垂れ気味のコの字突帯を貼り付ける。胴上半には粗い刷毛目痕が残り下半はややナデ消されている。器色は淡い明黄褐色を呈し、胎土には粗くはないが砂粒を多く含む。口径26.7cm、器高59.6cm。

37~39は砥石である。37は砂岩製で砥面は上面と先端部である。穿孔砥石であろう。38・39は黒灰色を呈した頁岩製の仕上げ砥石である。38は下部から出土している。

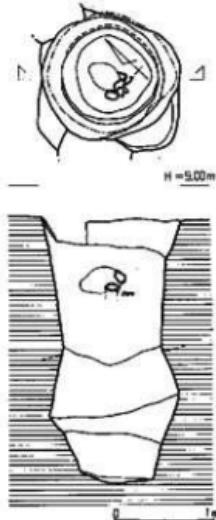


Fig.14 S E 83遺構実測図(1/60)

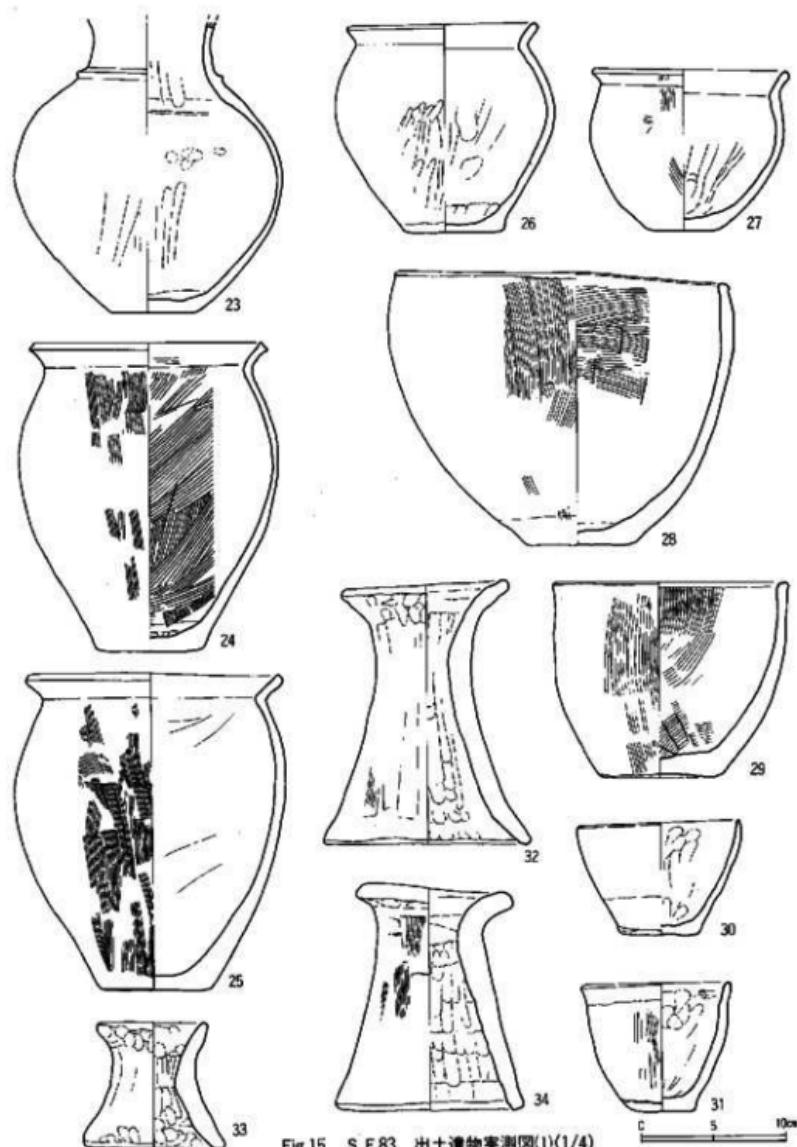


Fig.15 S E 83 出土遺物実測図(1)(1/4)

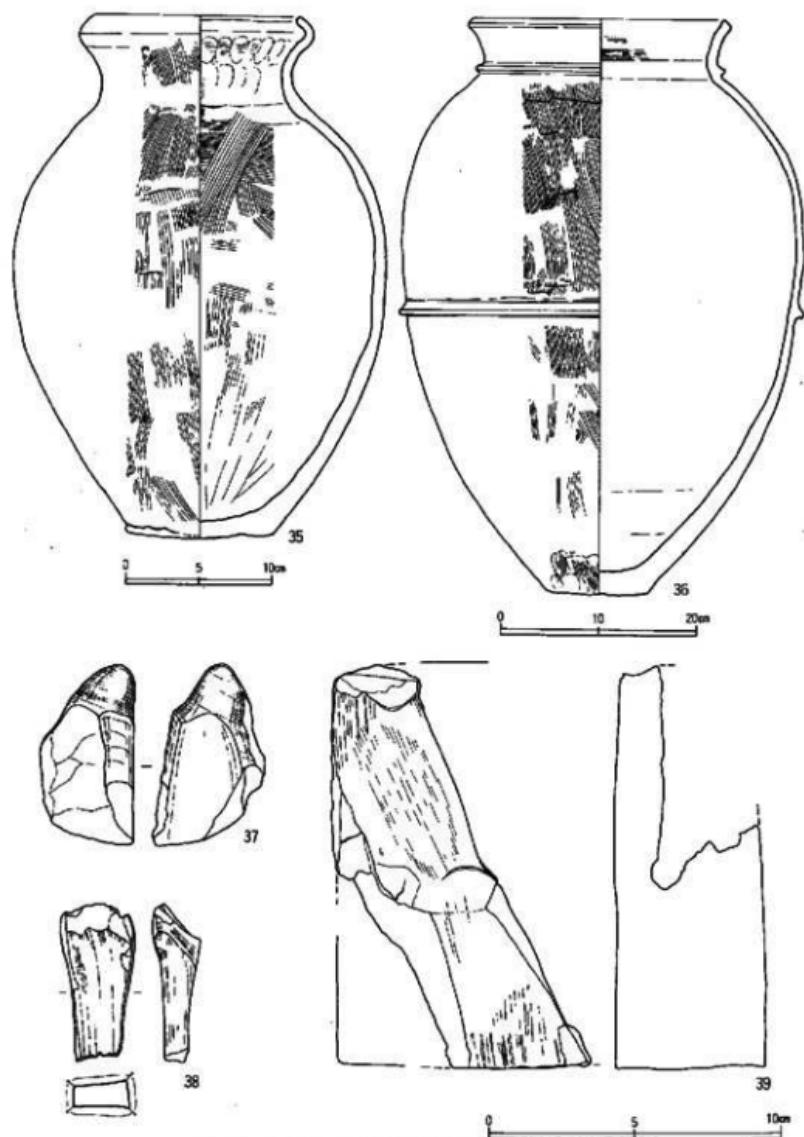


Fig.16 S E 83 出土遺物実測図(2)(1/2・1/4・1/6)

5 溝

SD44 (Fig.17~40、PL 1~3、PL第254集-29~32) 調査区南側で検出した逆台形を呈する大型の溝である。北東側から南西側へ延びており、さらに向きを西にかえて西方に延びる。西側は、民家で段落ちになっており詳細は分からぬ。中心部の方位はN56°Eで、最大幅2.5m、底幅1.5m、深さ1.2m前後を測る。調査区内で長さ43mを確認し、東方200mの第20次調査地点でもこの溝の延長を確認している。

基本的な層序はFig.17に示すとおりである。1 黒茶褐色土(後期前半の遺物を含む)、2 黒色土(やや茶味を帯びる)、3 黒色土(中期後半~末の遺物を多量に含む)、4 黒色土、5 暗黒褐色土、6 黑褐色土(5・6には弥生中期後半~末の遺物を多量に含む)、7 黒色粘質土(漆黒色で水が溜まっていた時期があり両端が抉れている)、8 黄褐色粘質土のブロック堆積(掘り上げた土が流入したものか)、9 黒色粘質土、10 暗褐色粘質土、11 褐色粘質土となっている。1・2層が上層、3層が中層上、5層が中層中、6層が中層下、7層以下が下層として遺物を取り上げている。しかし、上部では上層の下半部と中層上の遺物を混在して取り上げた部分がある。遺物の多くは5・6層を中心とする。下層は殆ど遺物が出土しなかった。

調査は、溝の延長が長いので任意に調査区分として6区に分けた。その後、東側の拡張区と南側の拡張区を設け、更に外柵工事と並行して203区を設けた。溝内には遺物が集中してみられる部分が4箇所あり、西側から東側に向かってA群からD群までのグルーピングを行なった。203区・I区拡張区、I区(A群)、II・III区(B群)、IV・V区(C群)、VI区・VII区拡張区(D群)として区分している。

203区・I区拡張区 (Fig.18~20) 40~42は勧先状口縁を持つ広口壺である。40には6個の浮文、42には2個対3箇所の円形浮文が貼付される。41の頸部外面には暗文が施される。43は口縁部と底部を欠くが頸部下と肩部に三角突帯を施す。44・45は短頸壺である。44は頸部の締りがなく45は三角突帯を施す。46・47は飼付の樽形壺である。胎土が精良で丹塗りが施される。41~44も丹塗りである。48は小型の鉢形土器で肩部に三角突帯を付す。49は袋状口縁壺、50・51は無頸壺、52は短頸壺である。49・50は丹塗り、51は底部穿孔がみられる。53は丹塗りの小型高壺である。

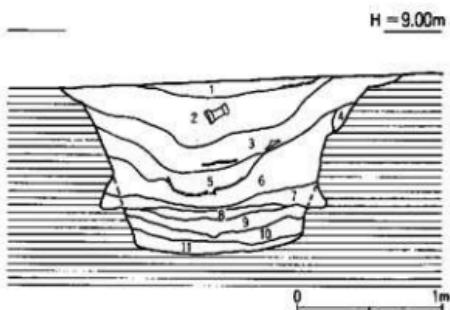


Fig.17 SD44 土層断面図(1/40)

54～56は外來系の土器である。54は口縁を上下に引き伸ばし3本の沈線を施す。外面刷毛目、内面篦削りである。胎土には石英・長石砂を含む。55は橙褐色の精良な胎土をもつ壺で肥厚する口縁部を上下に引き伸ばさない。56は粗雑な作りの甕である。瀬戸内地方の影響であろう。57は丹塗高坏で、口縁上端部に暗文を施す。58は丹塗りの小型の台か。59はく字状口縁の甕、60は胴下半で完結する特殊な土器である。逆L字状口縁を持ち、口縁下に丸味のある突帯、下端に大きな突帯を2条施す。下端内面は打ち欠きがみられる。組み合わせて使用する祭祀具と考えられる。61は筒形器台の鉢の部分である。外面に丹塗り暗文を施す。62は丹塗りの蓋頭部である。63・64は器台、65～67は支脚である。器台は胴部上位でやや絶まる。刷毛目調整あり。

I区（A群）(Fig.21・22) 筒形器台を中心に袋状口縁壺、甕、高坏、鉢などが組み合わさる。68・69は丹塗りの端正な作りの袋状口縁壺である。70は広口壺で円形浮文4個と口唇部に竹管状刺突文を施す。71～73は丹塗りの高坏である。74・75は小型の壺で75は上層出土。76は無頸壺の蓋、77・78は鉢形土器である。79は器高83cmの筒形器台である。鉢径31.8cm、底径42cmを測る。外面丹塗りで口縁部に暗文が施される。80～83は鉢形土器で、82以外は上層出土。84は中層から出土した甕である。く字状の口縁部を有し、口縁下と胴部に突帯を貼付する。

II・III区（B群）(Fig.23～26) 筒形器台を中心に最も多量の土器群が出土している。85～96は広口及び小型の壺である。90・92は丹塗りが施され、88は円形浮文が2個貼付される。97～99は丹塗りの袋状口縁壺、100～102は広口壺及び瓢形土器の口縁部である。103～105は無頸壺及び蓋である。106・107は長頸壺の口縁部である。108・109は瓢形土器である。109には肩部にノの字突帯が付く。110～119には丹塗りが施される。110～111は器台である。112は外反するL口縁の広口壺、113は大型の樽形土器である。114はく字状口縁を持つ大型の甕である。115は丸味を持った甕蓋、116は逆L字口縁を有する甕である。口唇部に刻目を施し、頭部と胴部にM字突帯を貼付する。112・115・116は丹塗りが施され、器壁は研磨されている。117～121は甕、122～125は鉢形の土器である。122は底部穿孔で、112も底部を穿孔、103は胴部に焼成後の穿孔がみられる。126は大型器台で、突帯、暗文がみられる。127は器高82cmの筒形器台である。口縁部に暗文を施し、鉢との境にM字突帯を1条めぐらす。126・127は丹塗りである。128～135はI層出土の一群である。128・130・131は複合口縁の壺、129は長胴の広口壺、132・134は器台、133は支脚、135は小型の鉢形土器である。後期前半代に属する土器群である。

IV・V区（C群）(Fig.27～30) A群・B群同様筒形器台を含む上器群である。136は肩部にノの字突帯を貼り付ける広口壺である。137は口縁部のはずれた壺であろう。138・139は口縁部を消失する壺で、139は袋状口縁壺になろう。140は瓢形、141はやや頸の長い広口壺である。139～141は丹塗り。142～147は小型の壺である。148・149は丹塗りの無頸壺、150は頭部と胴部に三角突帯を持つ小型の壺である。151・152は鉢付の樽形土器である。外面は丹塗りが施される。153は大型の直口壺で、なで肩長胴となる。154は上層出土の広口壺で時期的に新しい。155

は長頸壺の口縁部である。156～162は高壺である。幾つかのタイプがある。157は上層出土。155・156・158～162は丹塗りが施される。163はく字形口縁の壺で、164・165は丹塗りの壺である。164は逆L字口縁を持ち頸部に三角突帯、胴部にM字突帯2条を施す。166～168は大型の壺である。口縁はく字形に屈折し、口縁下に三角突帯を1条めぐらす。169～173は器台で、169のみ上層から出土。後期前半代に属する。174は筒形器台である。同一個体であるが接合しない。丹塗り磨研が施される。175は丹塗りの棹頭形土製品である。頂部に小孔を有し、放射状に11本の沈線を刻入する。頂部は放射状の研磨、それ以下は縱方向の研磨が加えられる。巣岐原ノ辻遺跡から同様のものが出土している。

VI区・VI区拡張区(D群)(Fig.31・32) 176・177は広口壺で176には胴部に三角突帯を有する。178・179は瓢形土器で178には胴部に焼成後の穿孔がみられる。180は口唇部に刻目を持つ壺である。181は袋状口縁壺、182・183は無頸壺の蓋と身である。184・185は鉢形土器で185には底部穿孔が認められる。186は器台である。187～194は壺で、189は丹塗り、192～194は大型の器形をとる。

土製品・絵画土器(Fig.33) 195・196は203区から出土した手捏土器である。内外面に指おさえ痕が残る。197～200は土製杓である。把手が横に伸びるタイプと上方に伸びるタイプのものがある。201～203は土製投弾である。204は焼成前の円孔を2孔有する直口壺である。205は、同様の2孔を有する直口壺で、口縁部に竈で鳥の絵を描く。デフォルメされているが流麗なタッチで描かれている。足は短く、三本で表現されている。足の長い水鳥ではなく、全体のプロポーションから「カラス」かそれに類するものではないかと推察される。口径16.2cm、器高18.5cmで、VI区D群から出土している。

石器・石製品(Fig.34～41, PL 3) Fig.34～206～214は石庖丁である。石材は206・207が安山岩質凝灰岩ホルンフェルス、208・210・211・213が小豆色の輝綠凝灰岩、209・212・214が頁岩である。出土地点は206・208・209・213が203区、207・210・214はII区、211はI区、212はIV区からそれぞれ出土している。215は緑泥片岩製の未成品である。203区出土。216はII区出土の石斧である。砂岩製。217は石鎌の先端部と考えられる。石材は安山岩か。218～223は石斧である。218は小型の石斧で、頁岩製、III区出土。219は太型蛤刃石斧である。安山岩製で風化が激しい。VI区出土。220も太型蛤刃石斧で、刃部を欠失する。V区中層から出土している。221はいわゆる今山産と呼ばれる太型蛤刃石斧である。石材は玄武岩質で、風化によって灰色を呈する。VI区中層出土。222は緑色片岩製の石斧である。石斧破損後敲石として転用されている。223も磨製石斧の破損品であろう。紐ズレ状の窪みが3箇所観察される。頁岩製。222・223は203区出土。224・225は敲打器である。224は両端に、225は先端部に敲打面が確認できる。224は緑色片岩製でI区拡張区中層出土。225は細粒砂岩製で、全体は研磨されているので石斧の再利用品かも知れない。IV区拡張区中層出土。226・227は擦石である。226は安山岩製でIV区中層出土。

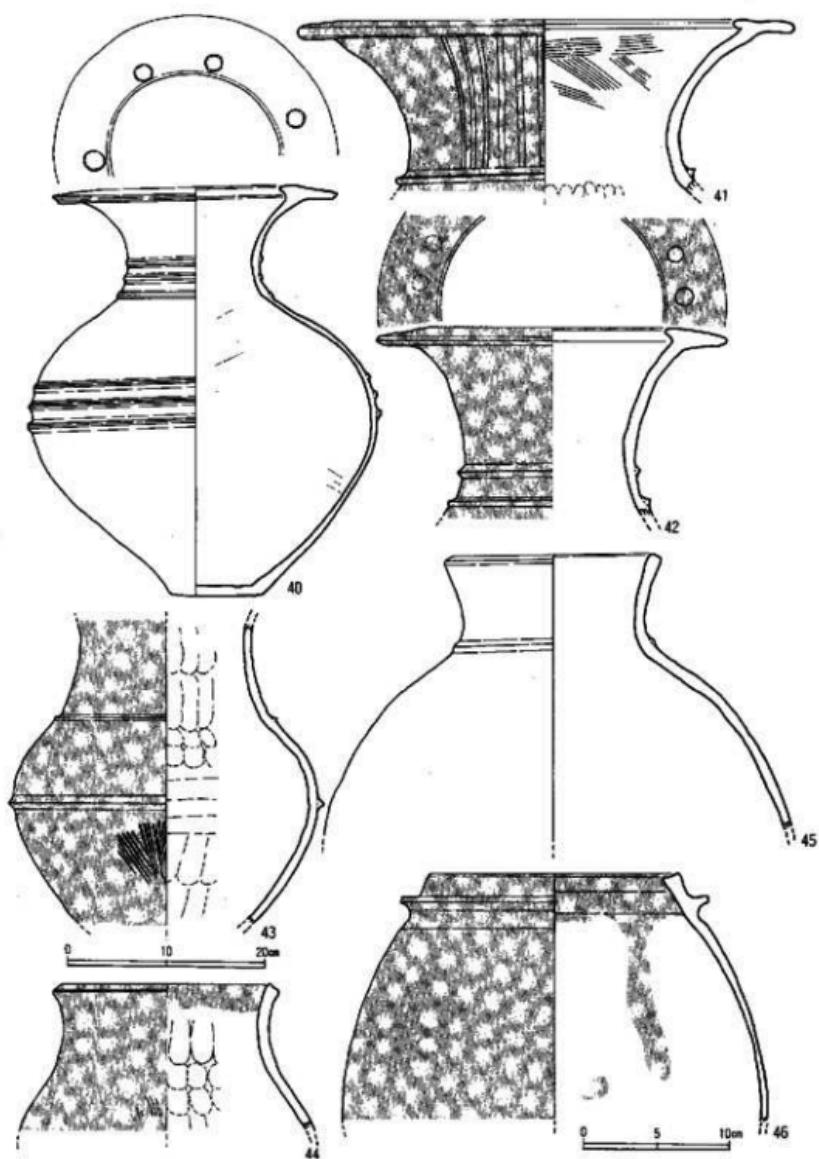


Fig.18 S D 44 203区・I区抜張区出土遺物実測図(I)(1/4-1/6)

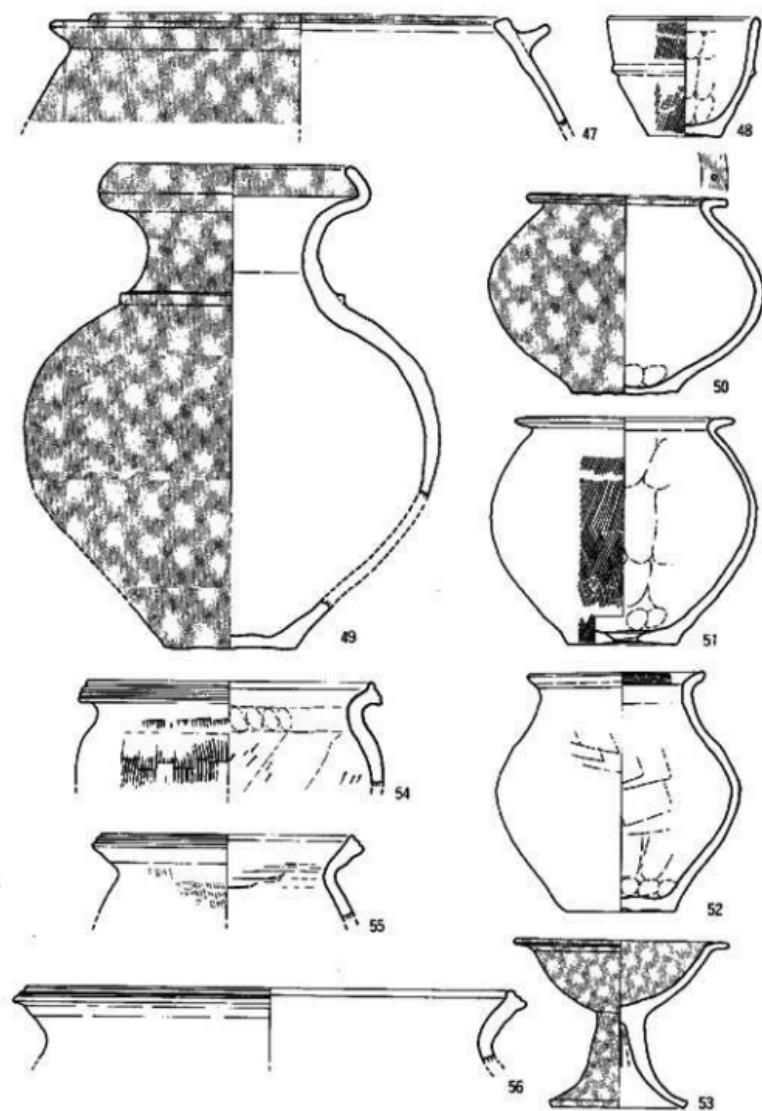


Fig.19 SD44 203区・I区擴張区出土遺物実測図(2)(1/4)

0 5 10cm

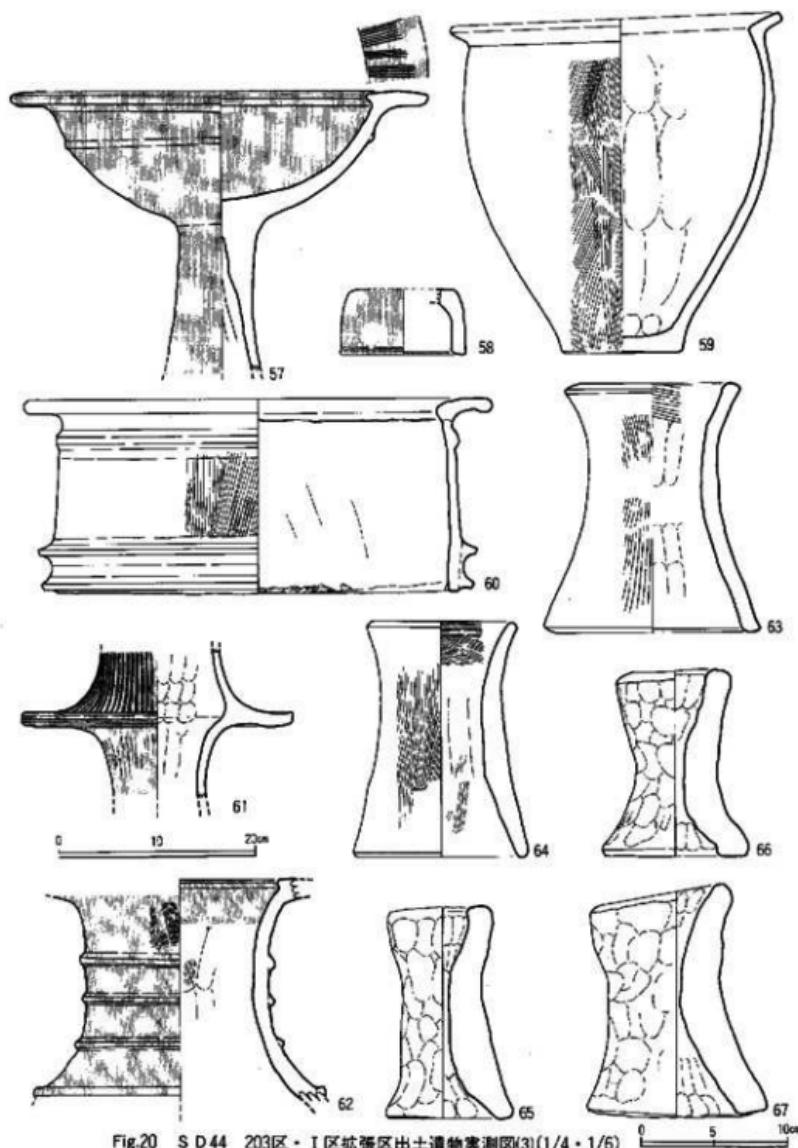


Fig.20 S D44 203区·I区扩张区出土遗物实测图(3)(1/4·1/6)

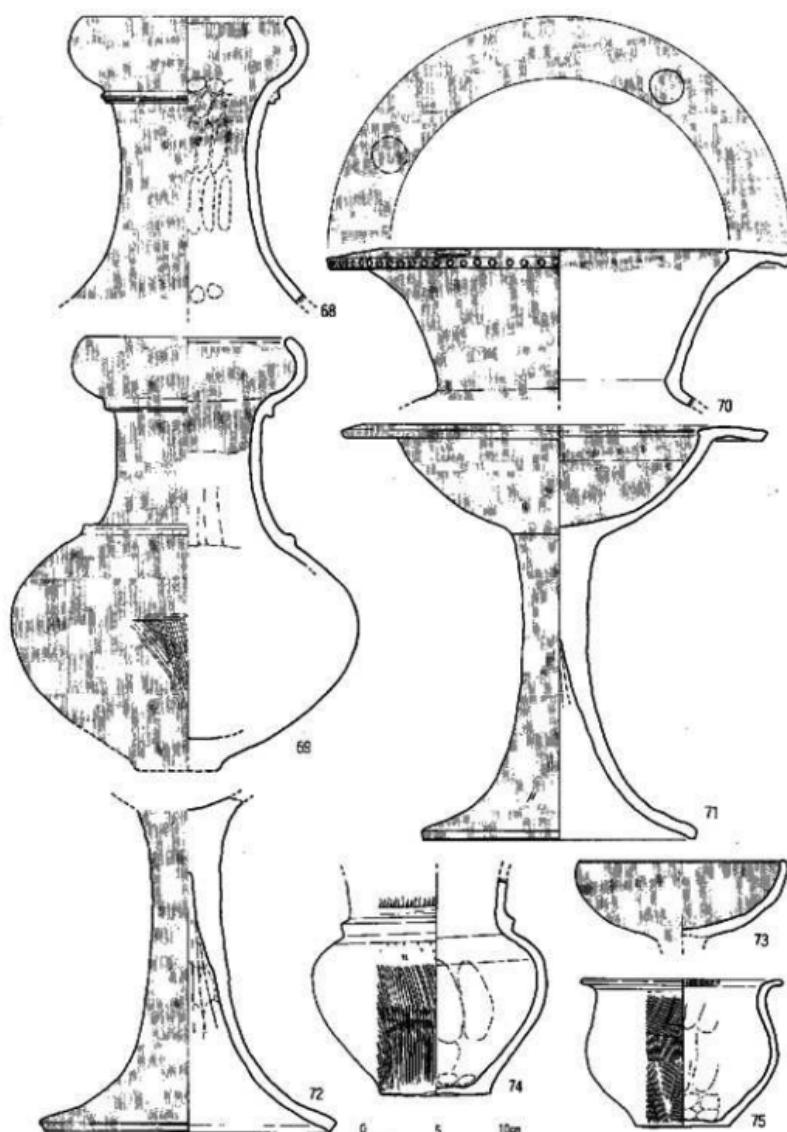


Fig.21 SD44 I区(A群)出土遺物実測図(1)(1/4)

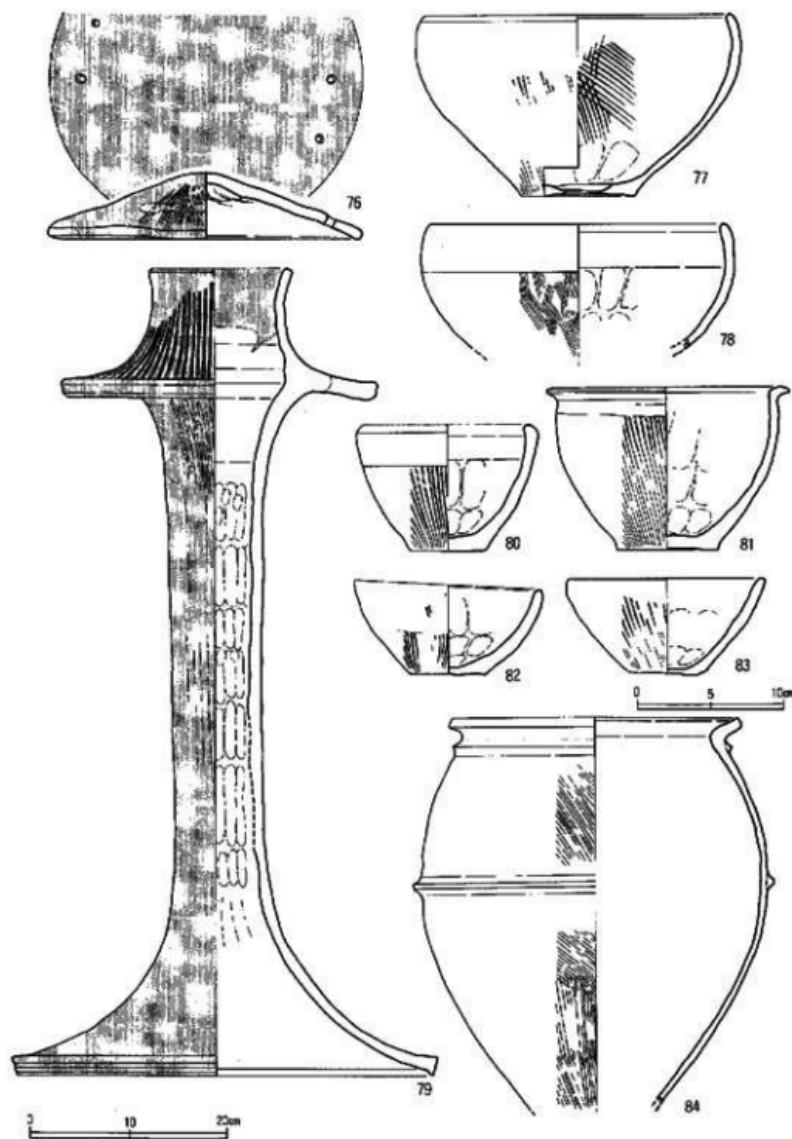


Fig.22 SD44 I区(A群)出土遺物実測図(2)(1/4 + 1/6)

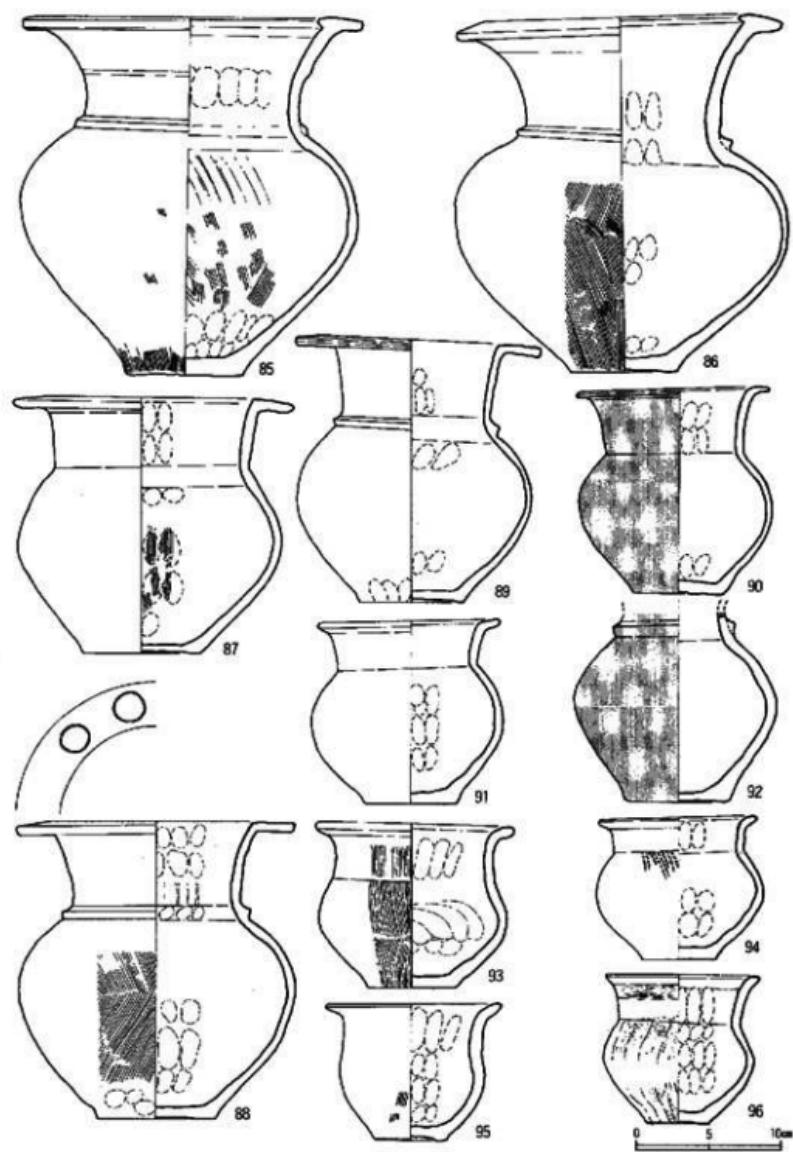


Fig.23 SD44 II・III区(B群)出土遺物実測図(I)(1/4)

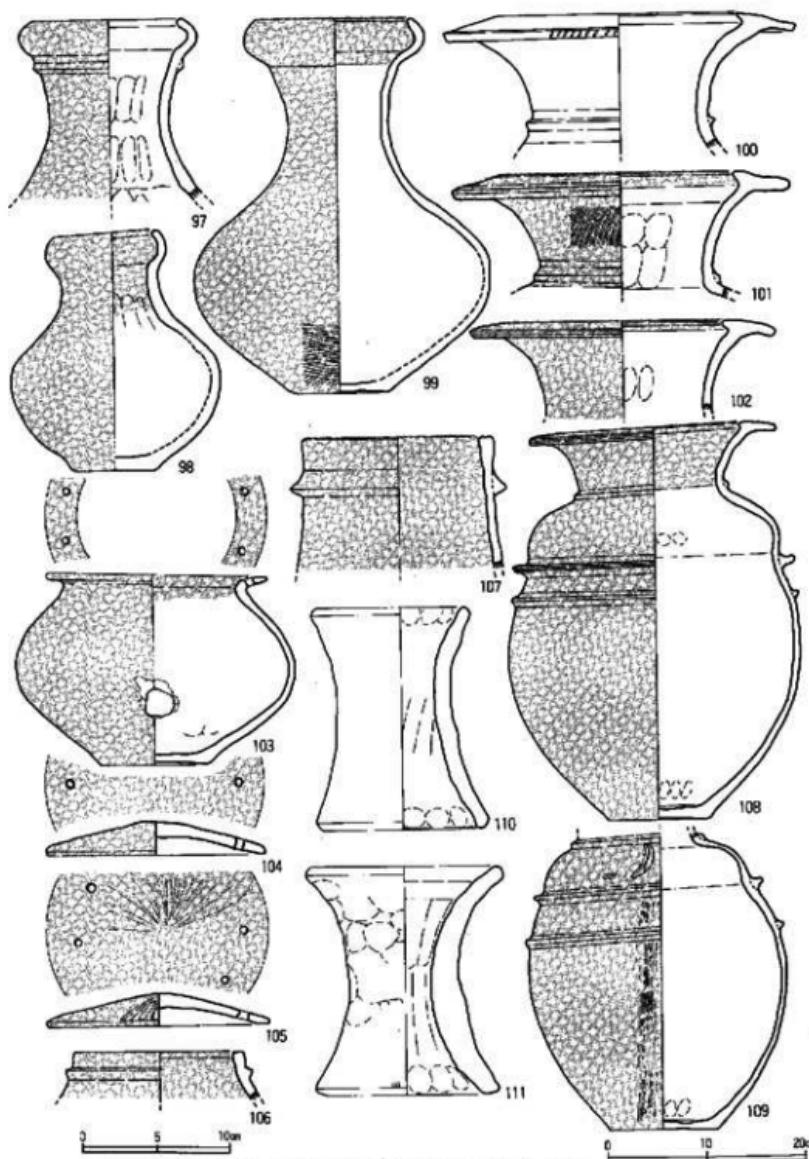


Fig.24 SD44 II・III区(B群)出土遺物実測図(2)(1/4・1/6)

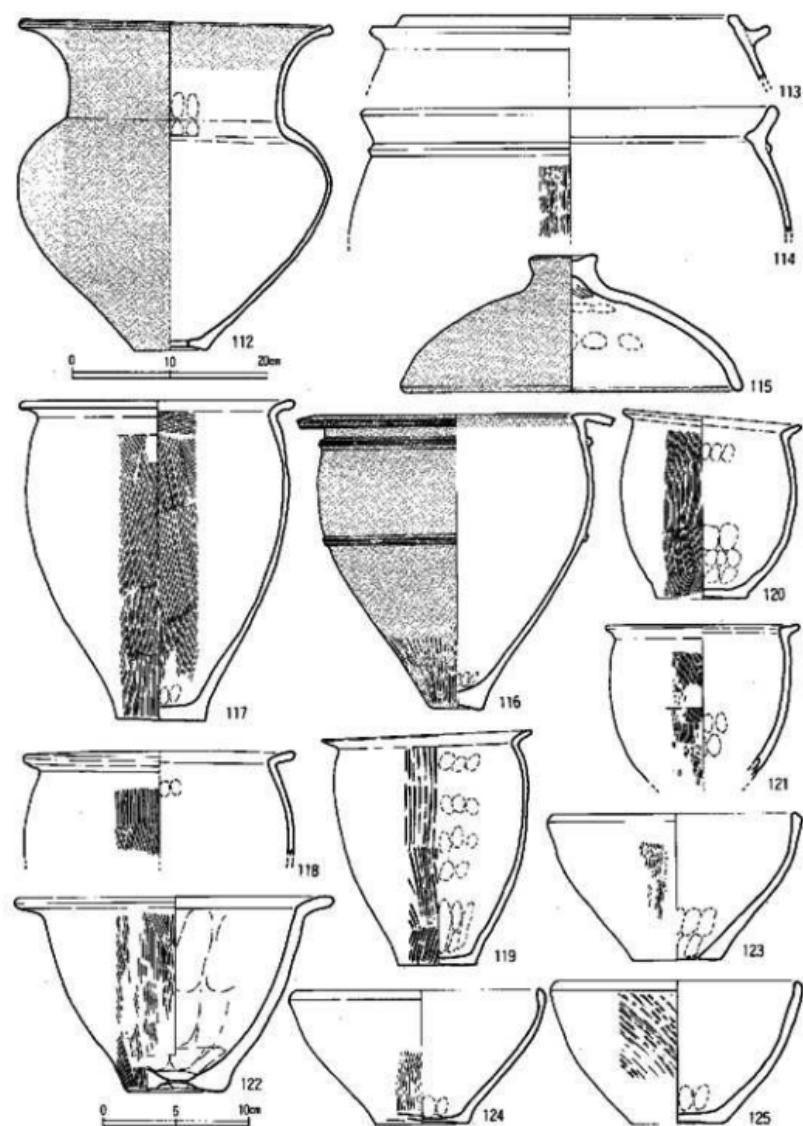


Fig.25 SD44 II・III区(B群)出土遺物実測図(3)(1/4・1/6)

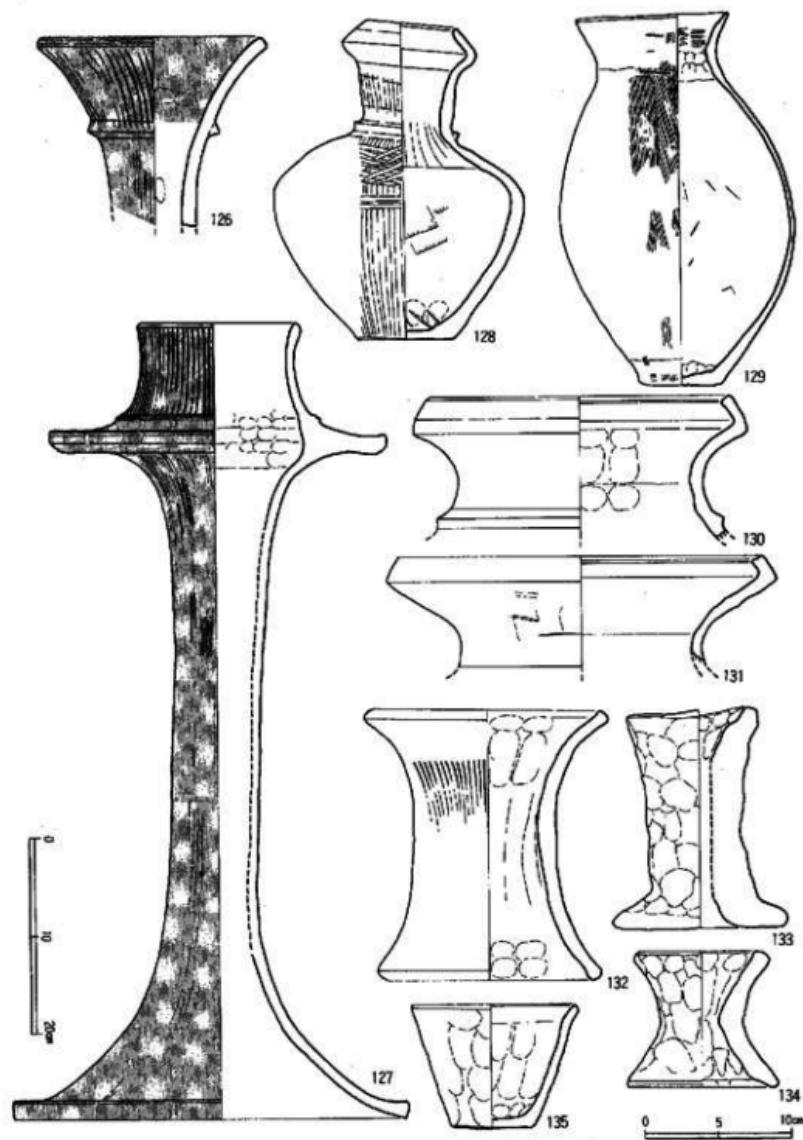


Fig.26 SD44 II・III区(B群)出土遺物実測図(4)(1/4・1・6)

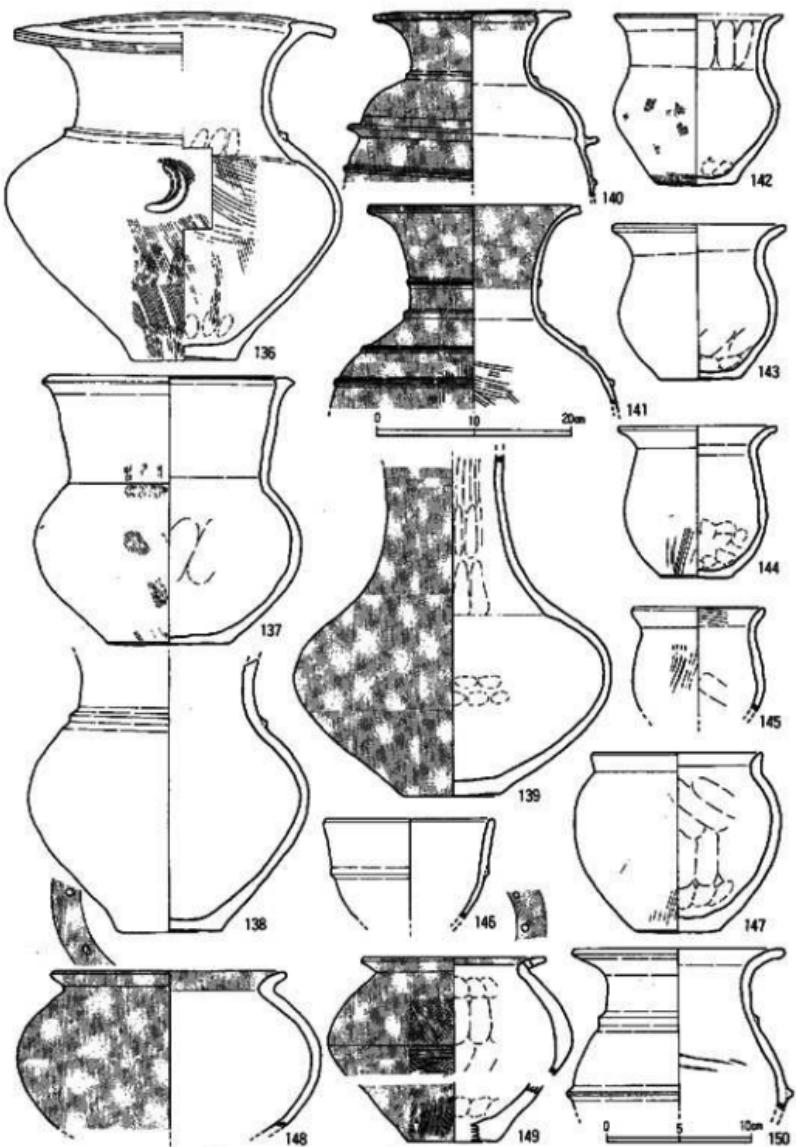


Fig.27 SD44 IV・V区(C群)出土遺物実測図(I)(1/4・1/6)

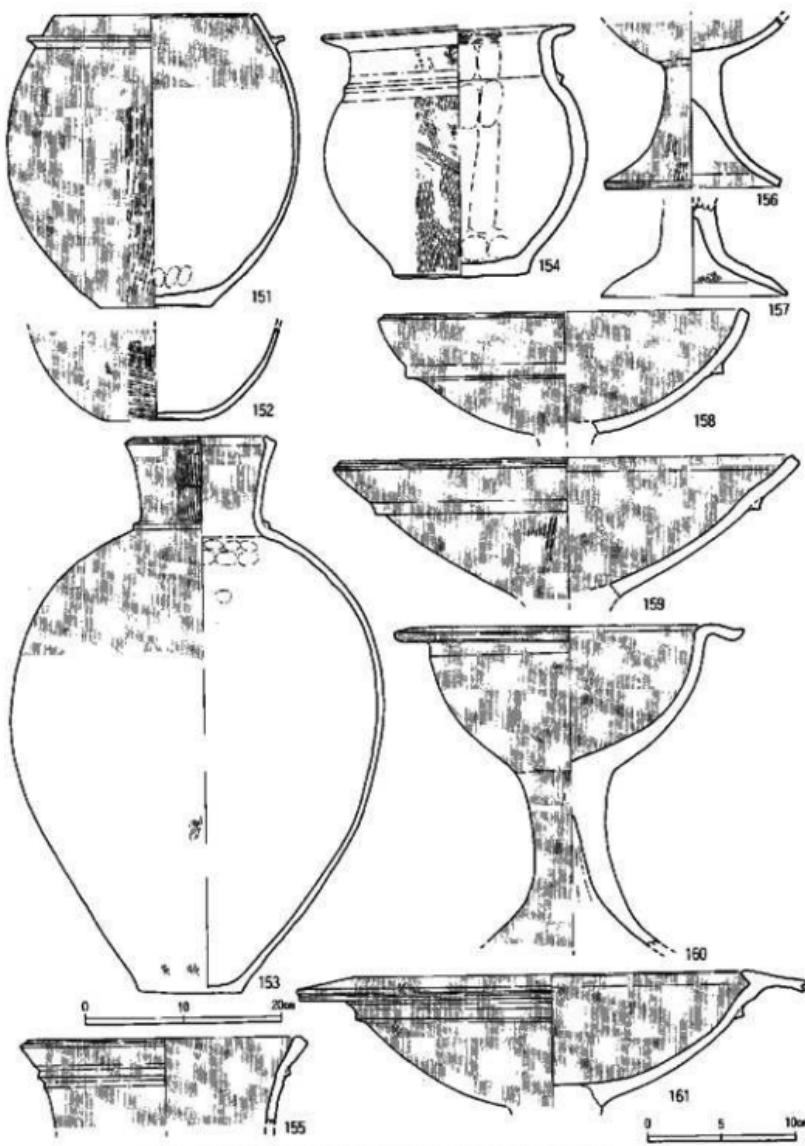


Fig.28 SD44 N・V区(C群)出土遺物実測図(2)(1/4・1/6)

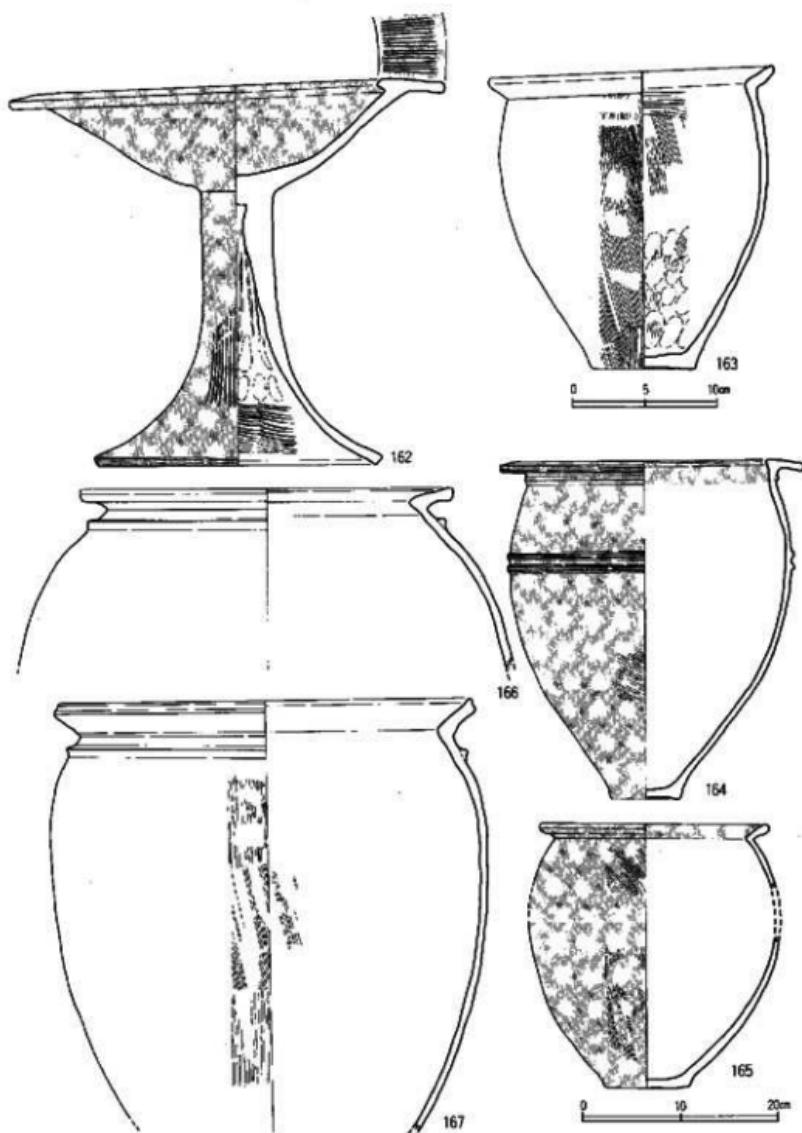


Fig.29 SD44 IV・V区(C群)出土遺物実測図(3)(1/4・1/6)

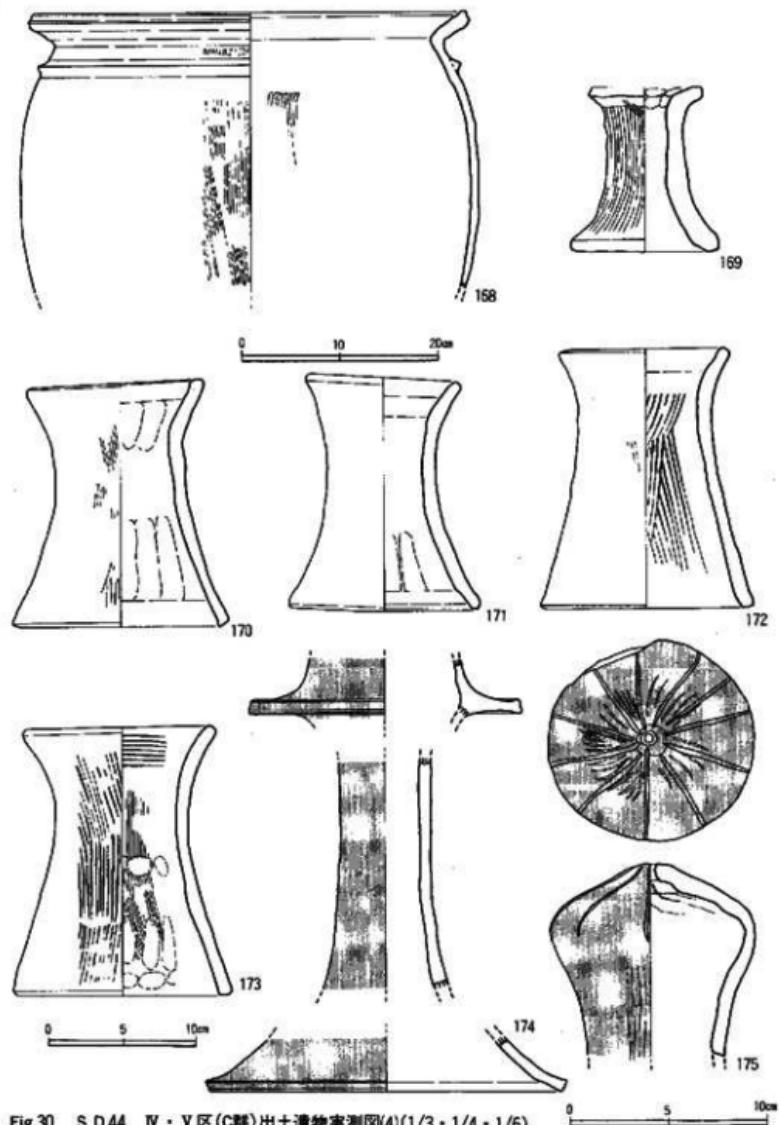


Fig.30 SD44 IV・V区(C群)出土遺物実測図(4)(1/3・1/4・1/6)

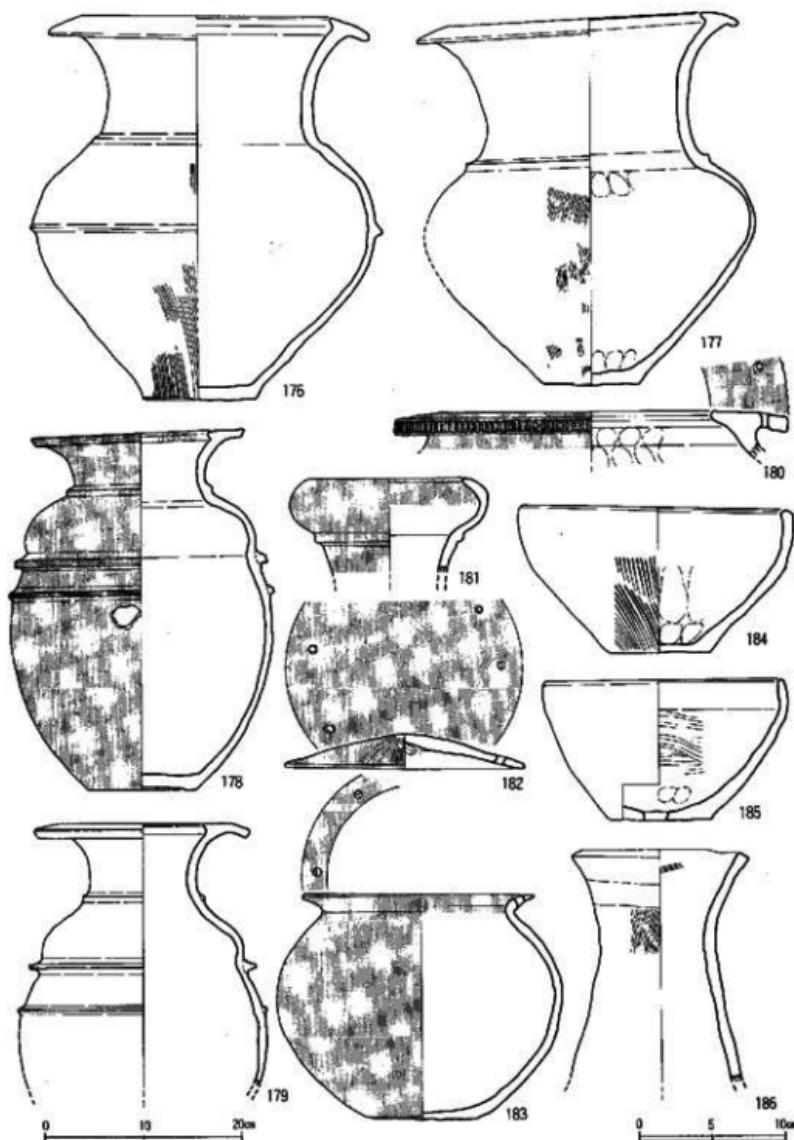


Fig.31 SD 44 VI区・抜張区(D群)出土遺物実測図(I)(1/4・1/5)

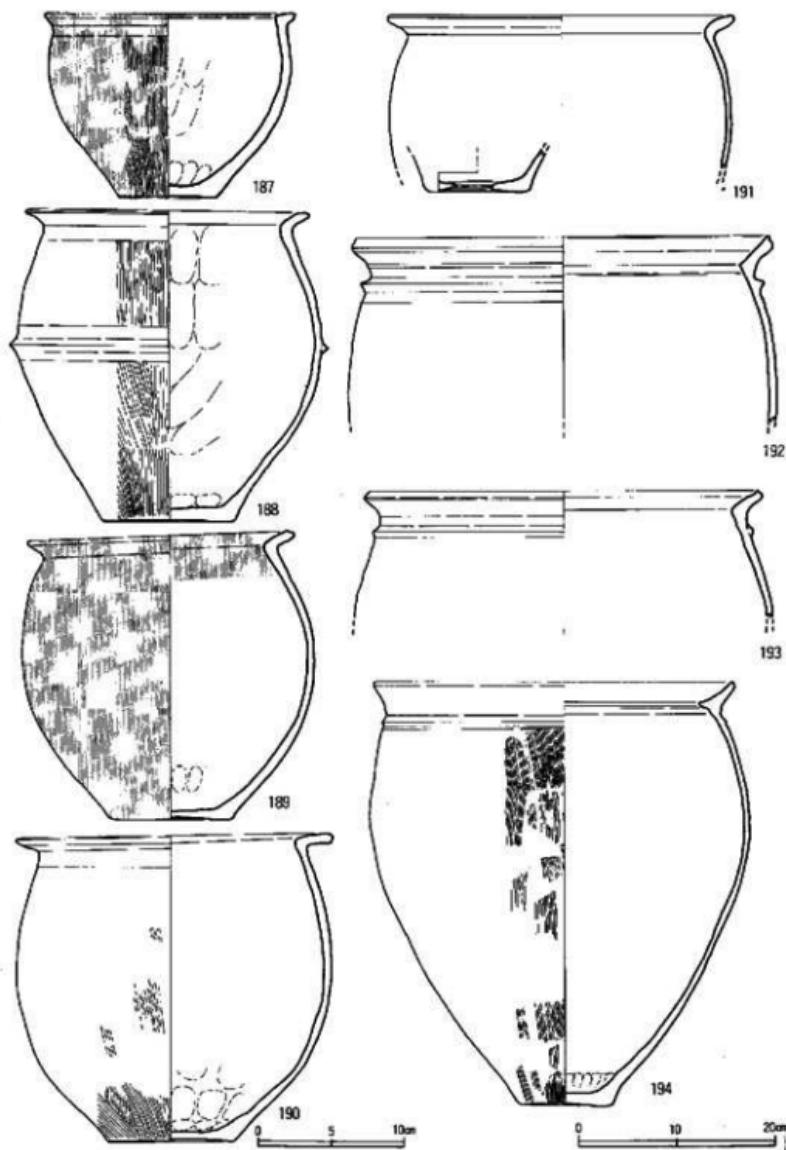


Fig.32 SD44 VI区・擴張区(D群)出土遺物実測図(2)(1/4・1/6)

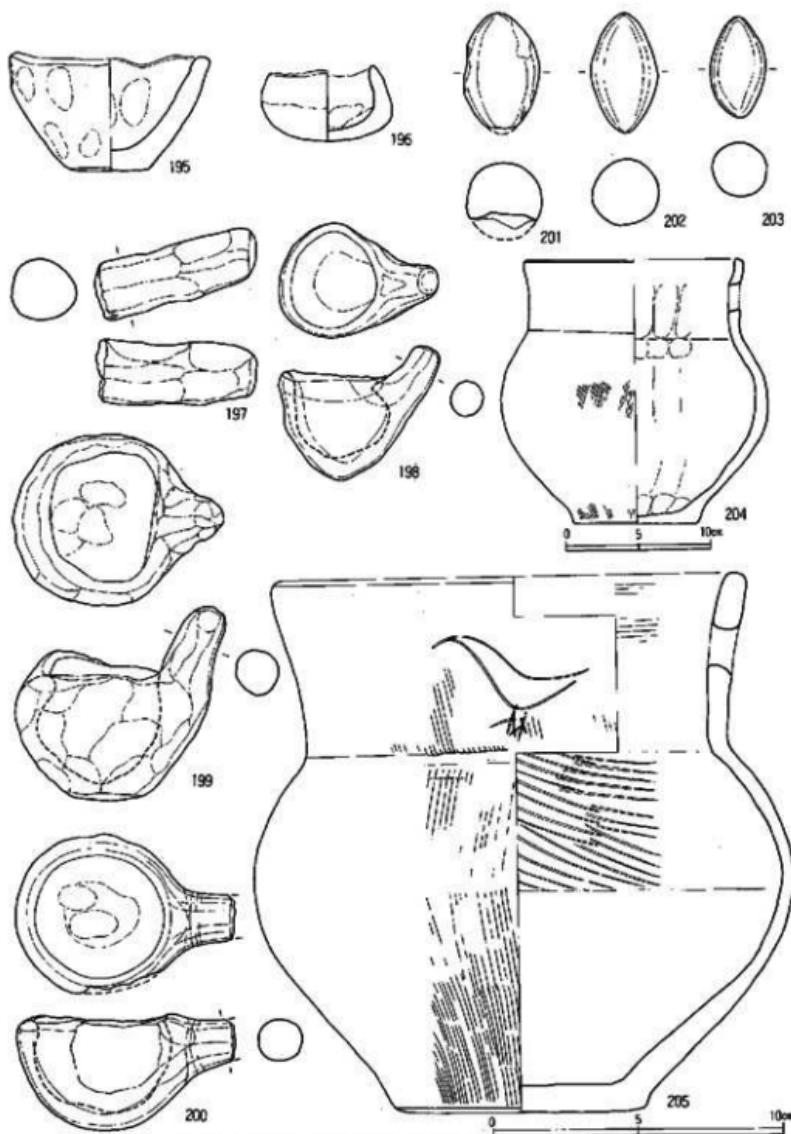


Fig.33 S D44 出土遺物実測図(土製品・絵画土器)(1/2・1/4)

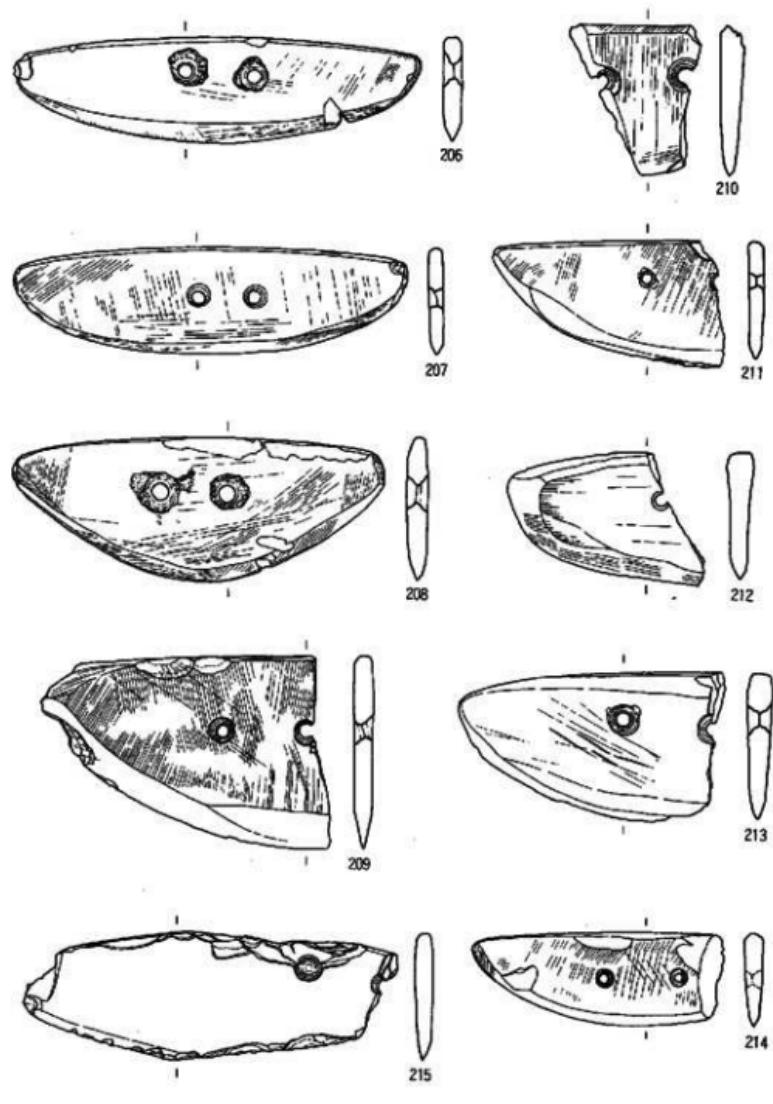


Fig.34 S D 44 出土遺物実測図(石器1)(1/2)

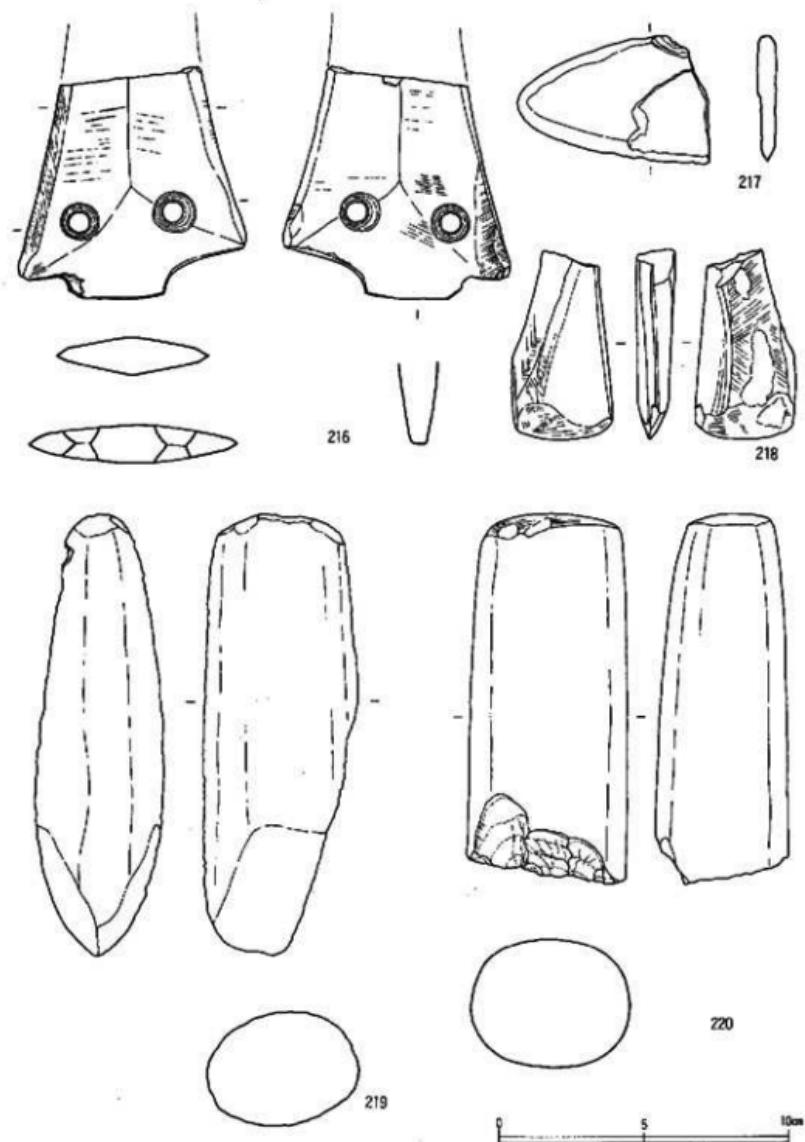


Fig.35 SD44 出土遺物実測図(石器2)(1/2)

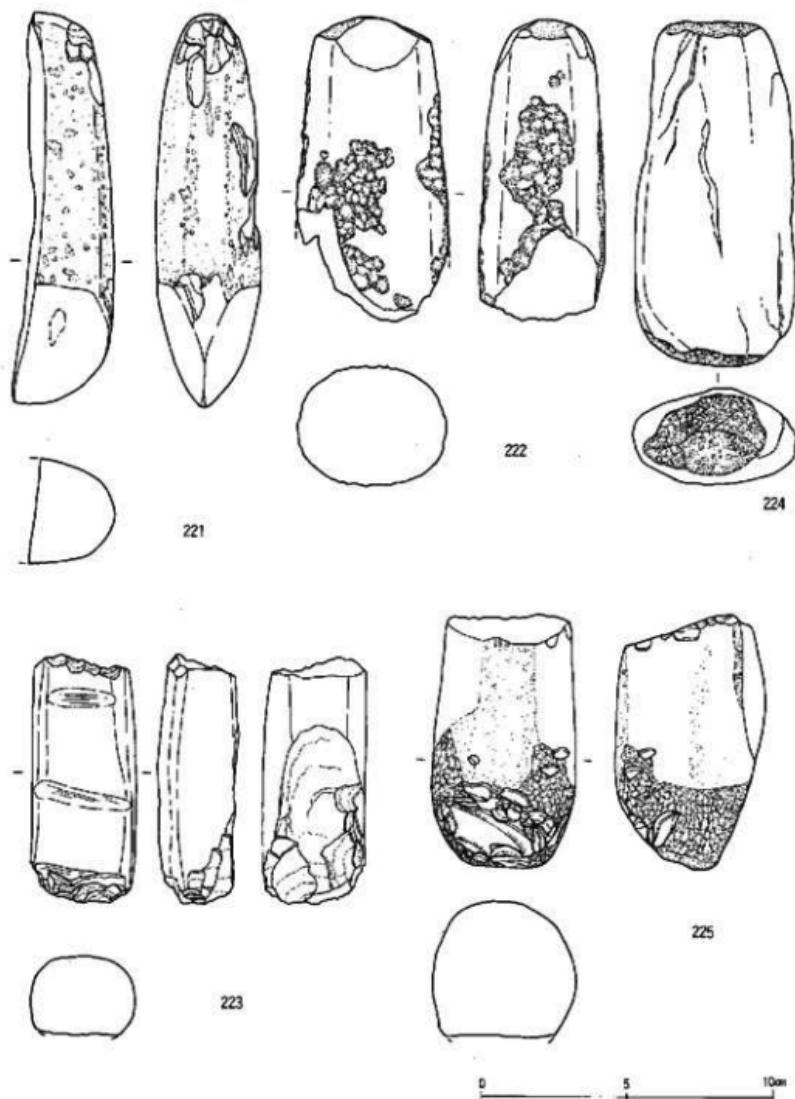


Fig.36 S D44 出土遺物実測図(石器3)(1/2)

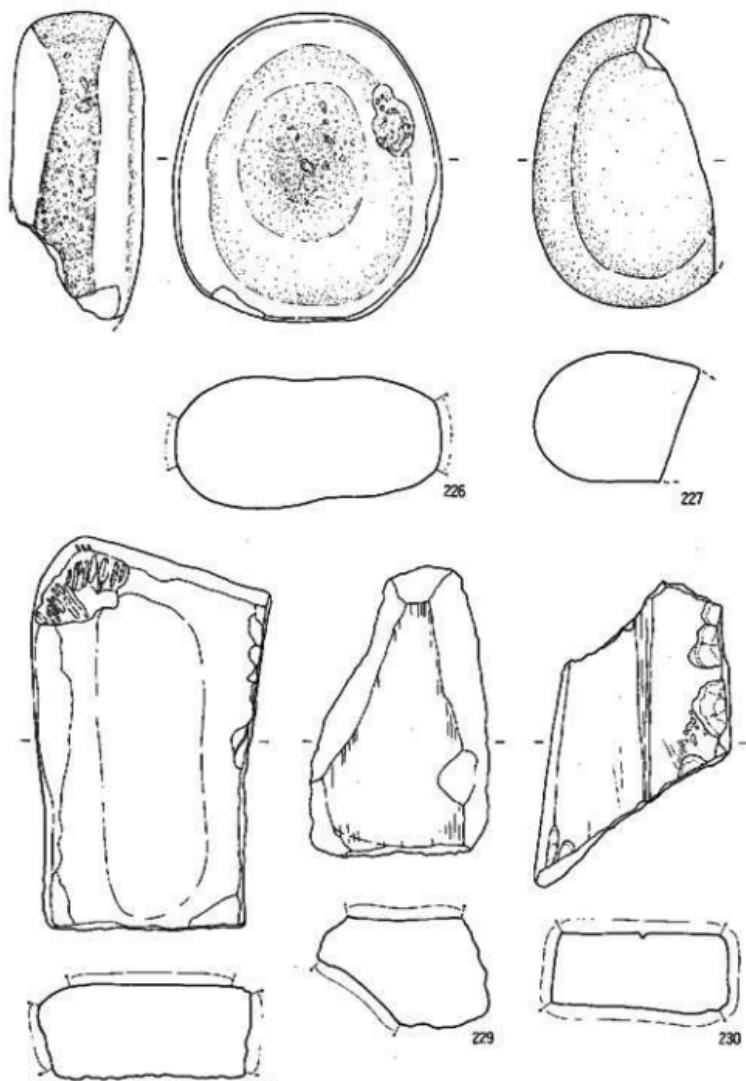
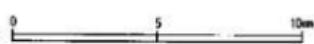


Fig.37 SD44 出土遺物実測図(石器4)(1/2)



SD44 石器(砾石・鋸型軒用砾石)

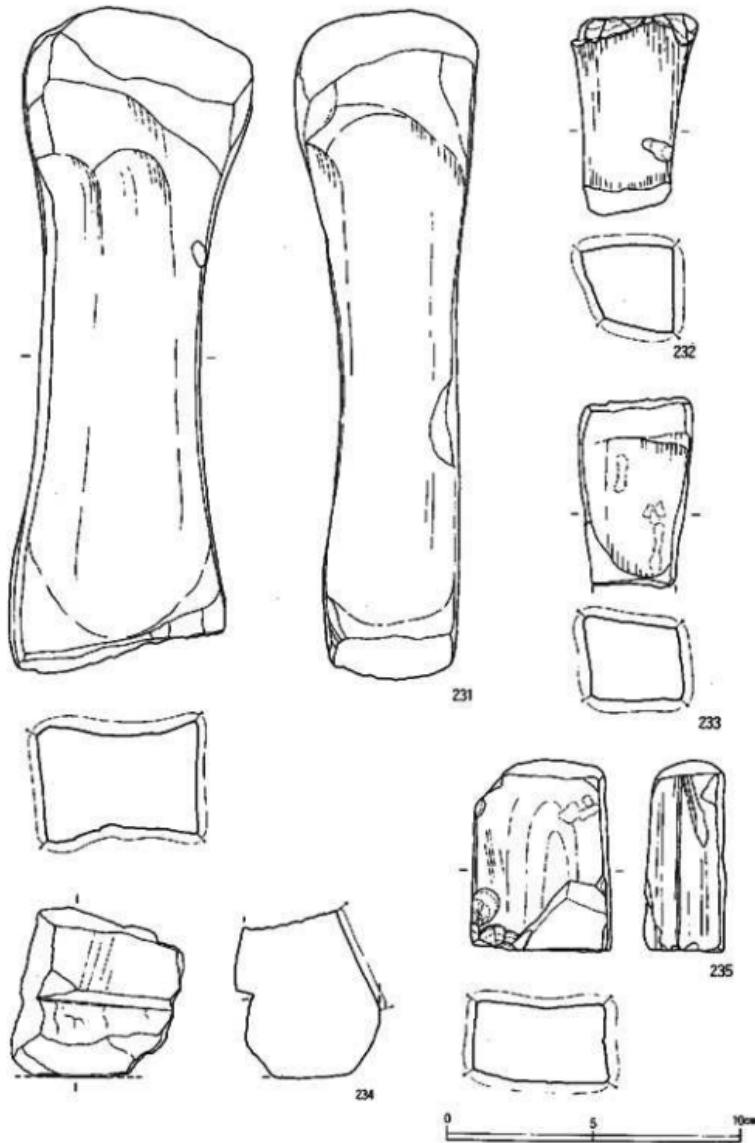


Fig.38 SD44 出土遺物実測図(石器5)(1/2)

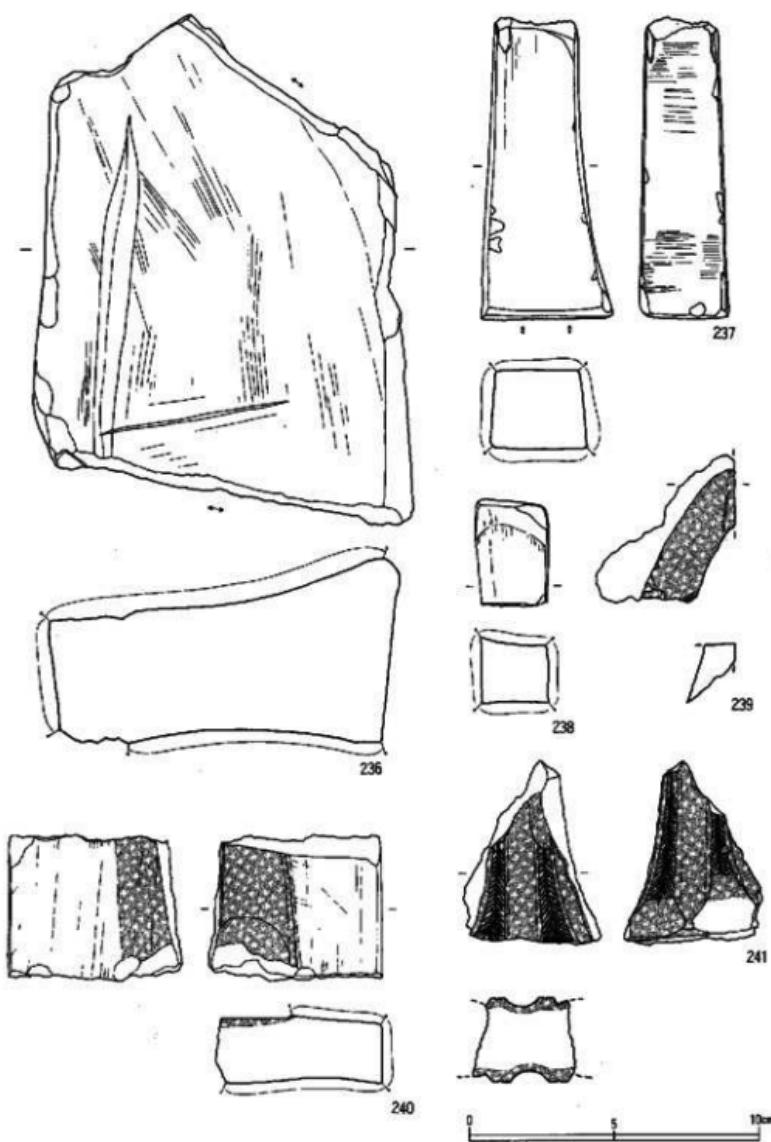


Fig.39 S D 44 出土遺物実測図(石器6)(1/2)

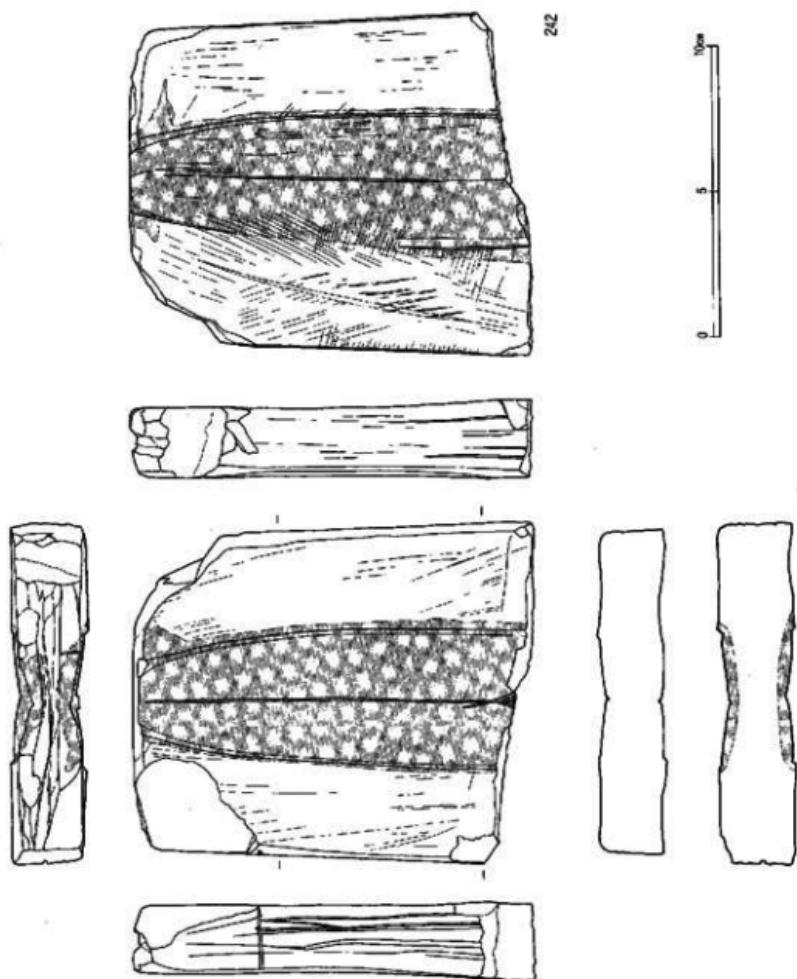


Fig.40 SD44 出土遺物実測図(石器7)(1/2)

柱穴石器(石底丁・石鑊・纺錐車・砥石・石斧・四石)

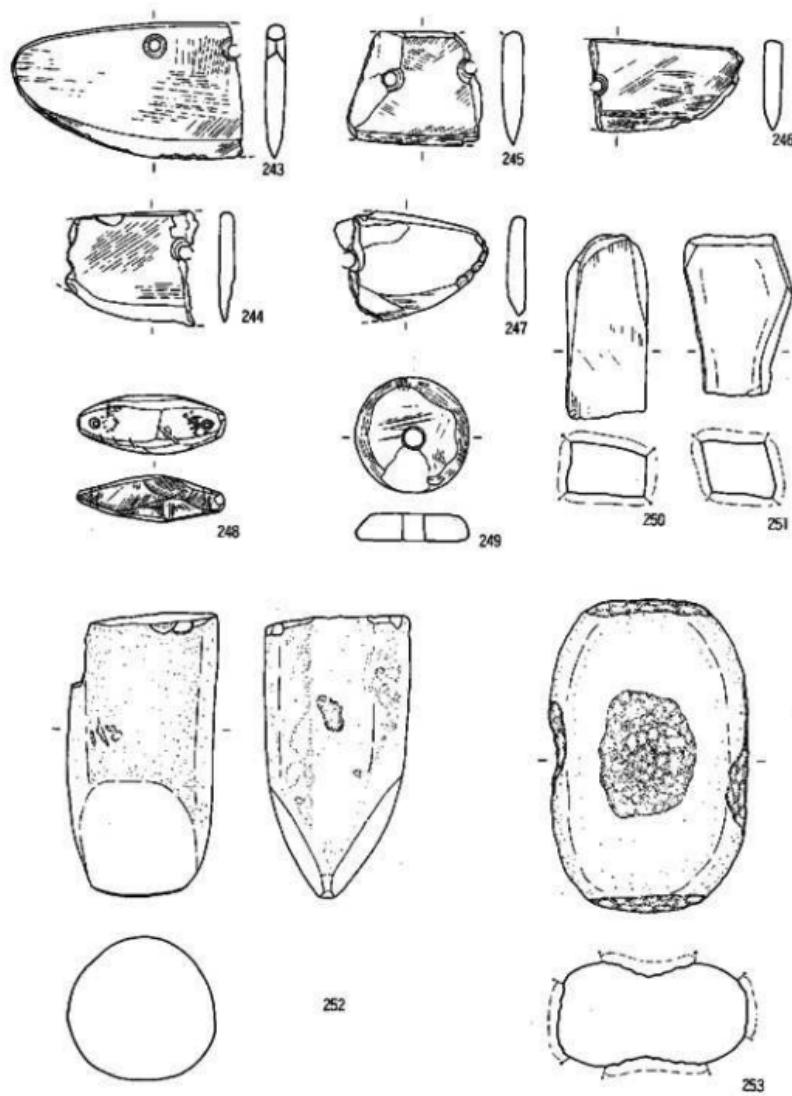


Fig.41 柱穴石器(1/2)

0 5 10cm

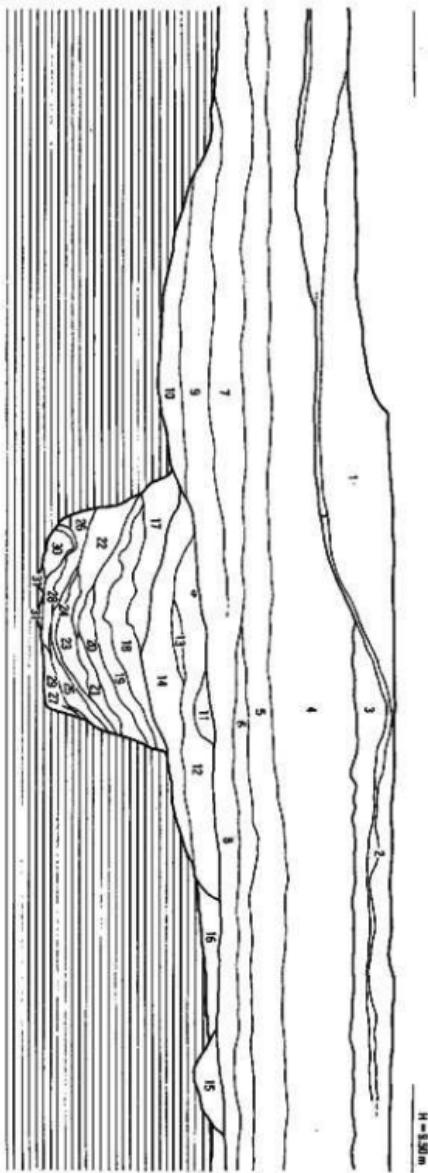
227は玄武岩製でV区中層から出土している。228～239は砾石である。砾石には粗砾、普通砾、仕上砾の3種類がある。石材は228が花崗岩、229～233が砂岩、234・236～239が石英長石変岩、235が頁岩である。228・229・231・237は203区、230・232・233・238はI区拡張区、234はI区、235はVI区拡張区、236・239はIV区中層から出土。230・236には溝があり、234には銅戈の開状の掘り込みがある。234・237～239は鉄型の転用砾石と考えられる。239は黒変している。240～242は中細銅戈の鉄型である。3点とも両面に型が刻まれた量産品である。240は身の部分で、241は柵の部分である。綾杉文が明瞭に残る。ともに石英長石変岩製でI区拡張区中層下から出土している。242は203区から出土し石英長石変岩製の鉄型上半部である。現存長13.8cm、幅11.7cm、厚さ2.6cmを測る。上端には紐かけ用の溝があり、側面には型合せ用の沈線や甲張りなどを擦り磨いたと考えられる条線が認められる。両面とも砾石に転用されて磨滅している。Fig.41は遺構確認時や柱穴から出土した石器である。243・245・246は遺構確認時、244はS P 487、247はS P 686から出土した石庖丁である。243～245・247は螺旋凝灰岩製、246は頁岩製である。248はS P 454から出土した頁岩製の石鍤で両端に小孔を有する。249は滑石製の紡錘車で、S P 556出土。250・251は砾石である。250はS P 574から出土した鉄型転用砾石か。石英長石変岩製。251は砂岩製である。S P 588出土。252は重量のある磨製石斧である。安山岩製でS P 1064出土。253は巨晶の角閃安山岩製凹石である。S P 1244から出土。中央部は両面から窪み、上下端は凸面状の敲打面、両側は不規則に窪む。

S D 89 (Fig.42～51, PL 3・4, PL第254集-33・34) 調査区東側で検出された逆台形状の大溝である。中央部でやや湾曲しているが方位は殆ど真北で、磁北から6°西偏している。溝幅は確認面で2.1m前後、底面は1.2m前後である。深さは1.2m程度残存していた。溝の延長は34.5m確認でき、任意に6区分して調査を行なった。溝底は南側がやや深く、北側に向かって0.3m程高くなっている。遺物は基本的に上層、中層、下層に分けて取り上げた。しかし、溝の延長が長いため南側と北側ではやや時期差が認められた。Fig.42は南壁の土層堆積状況である。
 1 盛土、2 黒灰色土(旧表土)、3 灰黑色土、4 褐色土、5 暗褐色土、6 暗褐色土、7 暗褐色土(やや黒味がある)、8 暗褐色土(黒味の強い部分が斑にある)、9 暗褐色土、10 暗褐色土(黒味が強い)、11 暗褐色土混り黒色土(粘性が強い)、12 暗褐色土混り黒色土(粗砂がうねって帯状に断続して入る)、13 暗褐色土混り黒色土、14 暗褐色土(粗砂含む)、15 暗褐色土、16 暗褐色土(黄褐色ロームを斑らに含む)、17 黒色粘土混り灰褐色粘質土、18 黑色粘土混り黄褐色ローム、19 黑色粘質土(ロームを斑らに含む)、20 黑色粘土混り黄褐色ローム、21 黑色粘土混り黄褐色ローム、22 暗黃褐色土(ローム細粒含む)、23 明黃褐色ローム、24 黑色粘質土、25 暗黃褐色粘質土(ローム細粒含む)、26 暗黃褐色粘質土(ローム細粒含む)、27 黑色粘質土、28 黑色粘質土、29 暗黃褐色粘質土(やや黒味を帯びる)、30 暗黃褐色粘質土(ロームブロック含む)、31 暗灰褐色粘質土となっている。7層以下14層までは中世、15層はS D 92の堆積土である。S D 89の土層

堆積土は溝を掘り下げた基盤土の再流入土である。特に基盤土ブロックの大きなものは西側から流入している。溝掘削土の多くは西側に積まれていたことが想定できよう。遺物取り上げの土層対応関係は、17層と18層の上部が上層、18層の下部と19層が中層上、20～22層が中層中、23層が中層下であり、24層の黒色粘質土以下が下層である。ただし、レベルを記入しながら取り上げた訳ではないので、ある程度厳密性に欠ける所がある。相対的には下層の遺物が古く、上層に向かって新しくなる傾向が見て取れた。遺物の実測図はI～III区とIV～VI区に分けて組んでいる。いる。IV～VI区に行くに従って溝底のレベルが0.3m程上がっており下層として取り上げた遺物の時期が新しくなる傾向にあったからである。

Fig. 43~45はI~III区出土の遺物である。254~262は須恵器の坏蓋と坏身である。254はI区最下層出土の坏蓋である。255はII区下層出土で、上面に木ノ葉状のヘラ記号が付く。256~262は坏身である。立ち上がりは短く内傾反、上層に行くに従って口径が小さくなる。256はII区中層下257・258はI区下層、259はI区中層、260はIII区下層、261はIII区中層上、262はII区中層上から出土。263~269は検出時及び上層から出土した須恵器坏蓋及び坏身である。263には内面に

Fig.42 SD89土壤断面图(1/40)



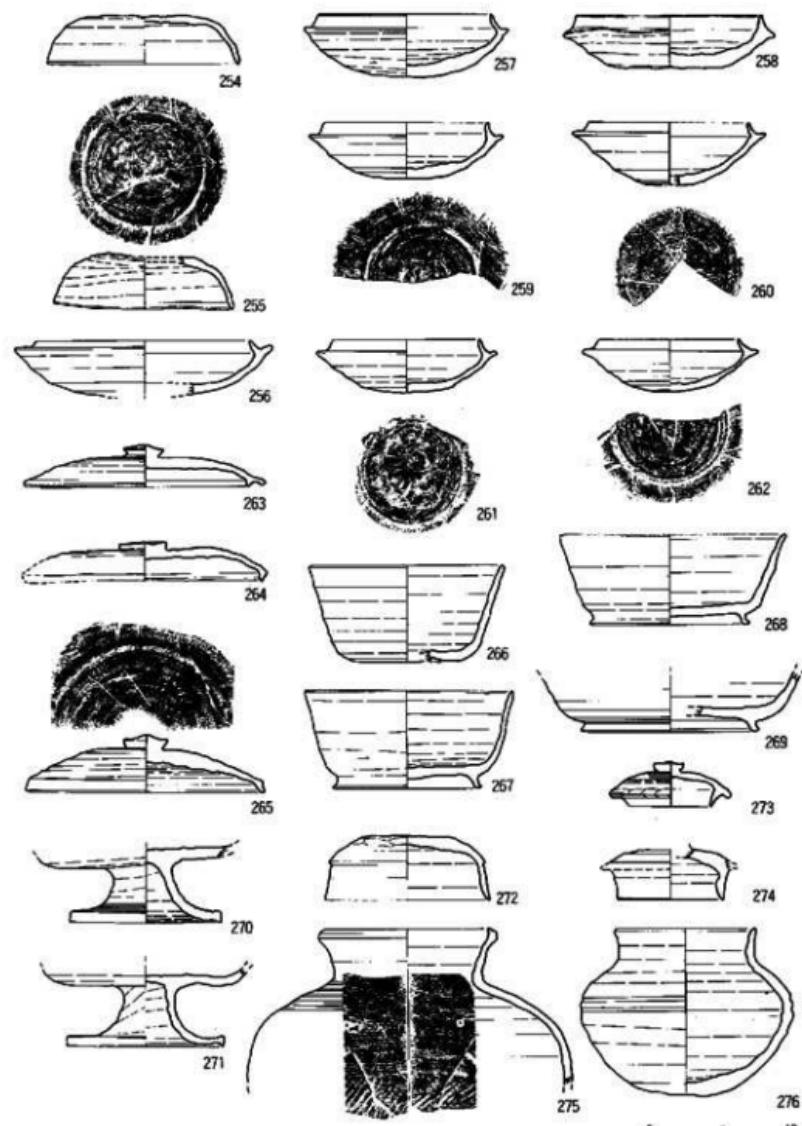


Fig.43 SD89 I・II・III区出土遺物実測図(1)(1/4)

0 5 10cm

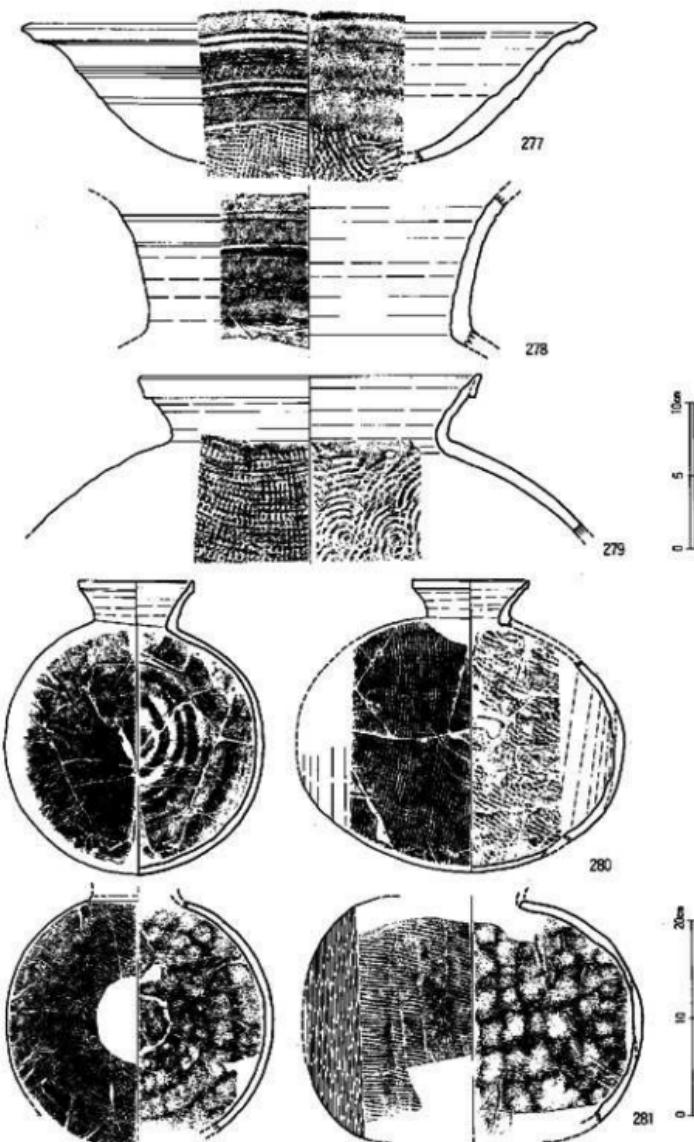


Fig.44 SD89 I・II・III区出土遺物実測図(2)(1/4・1/6)

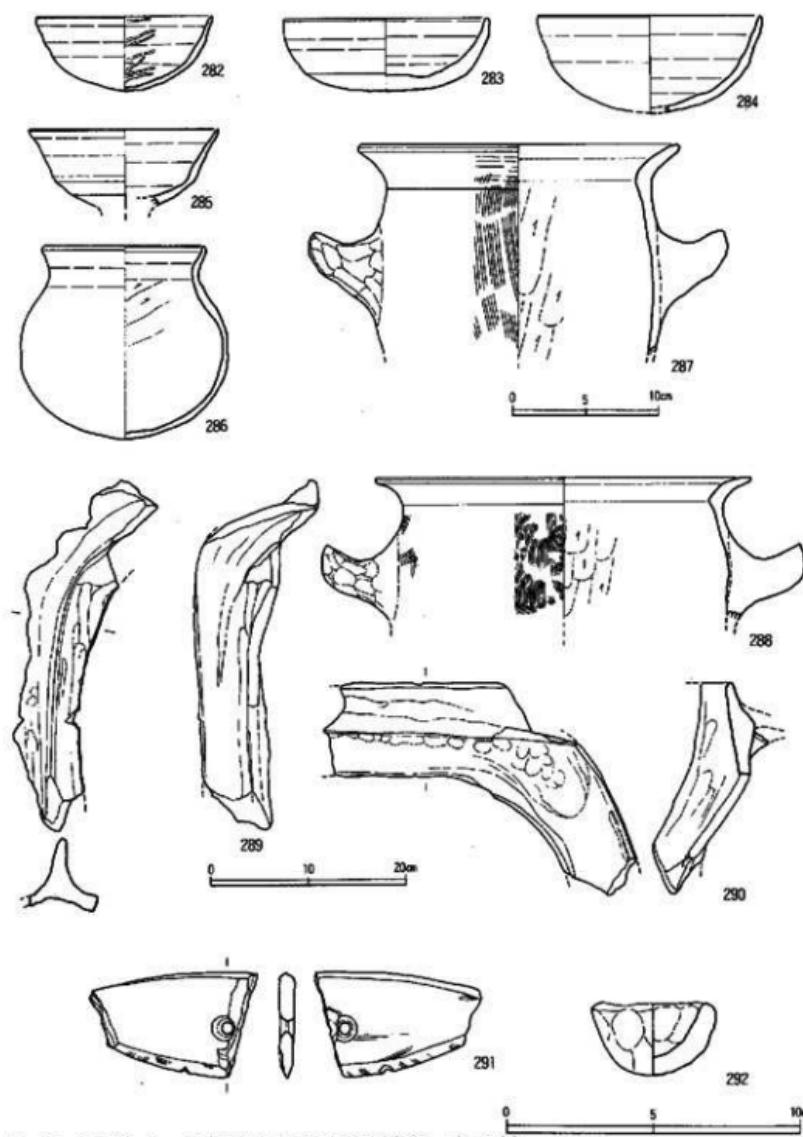


Fig.45 SD89 I・II・III区出土遺物実測図(3)(1/2・1/4・1/6)

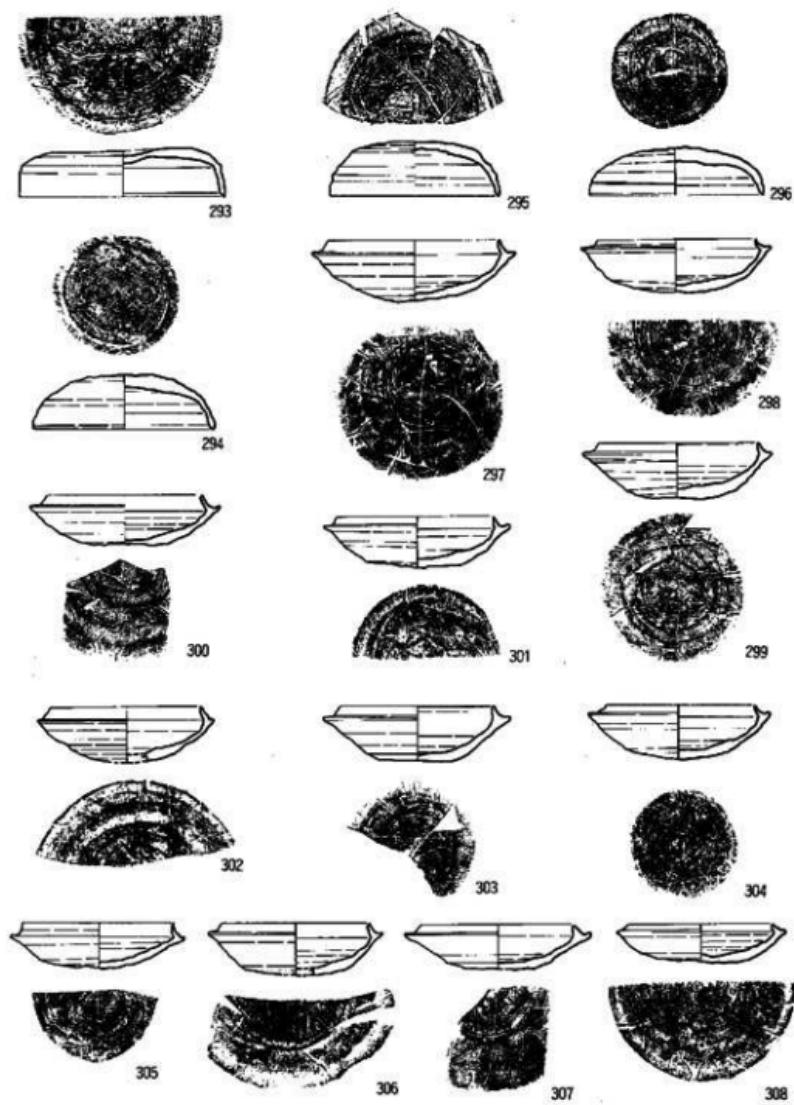


Fig.46 SD89 IV・V・VI区出土遺物実測図(1)(1/4)

0 5 10cm

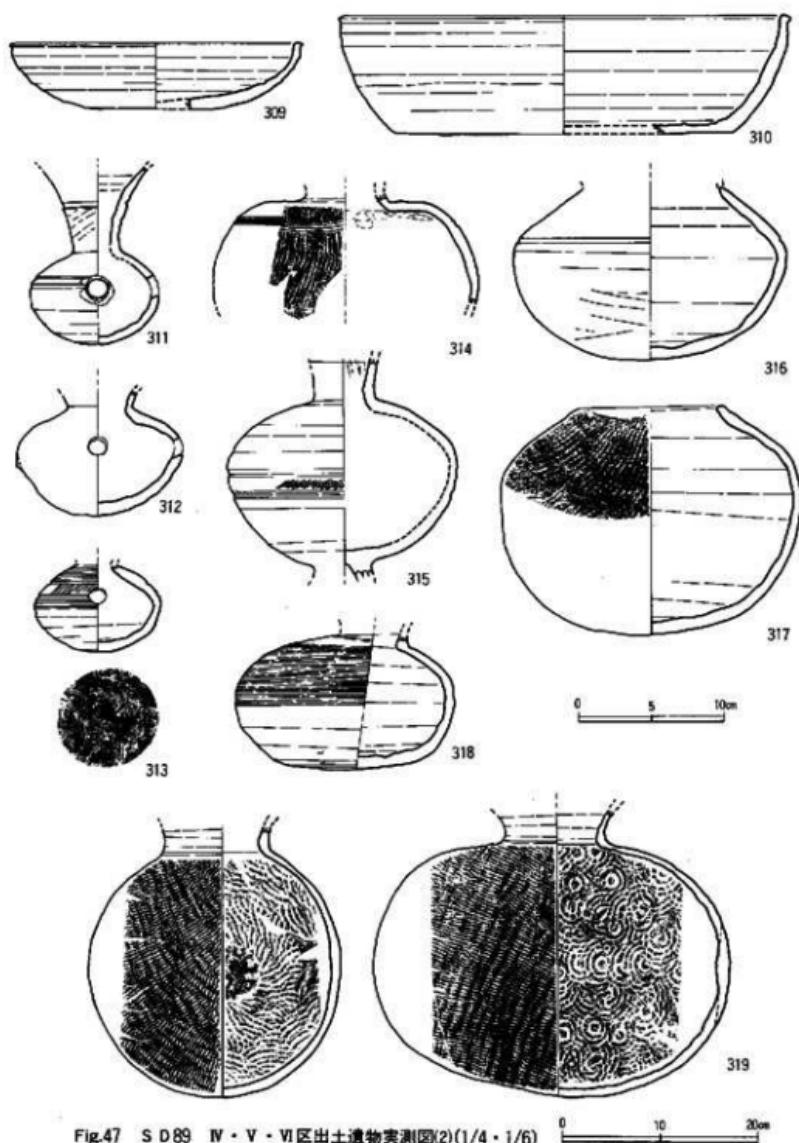
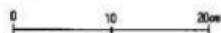


Fig.47 SD89 N~V~VI区出土遺物実測図(2)(1/4・1/6)



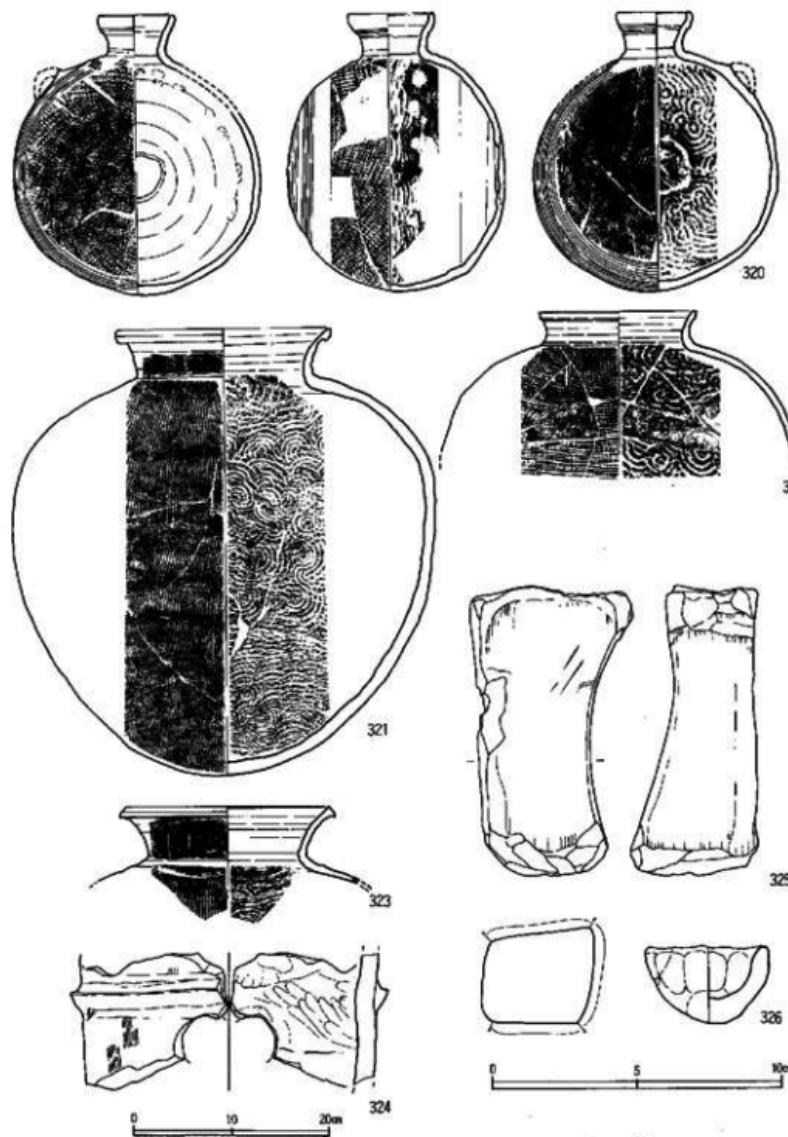


Fig. 48 SD89 IV ~ V ~ VI 区出土遺物実測図(3)(1/2・1/6)

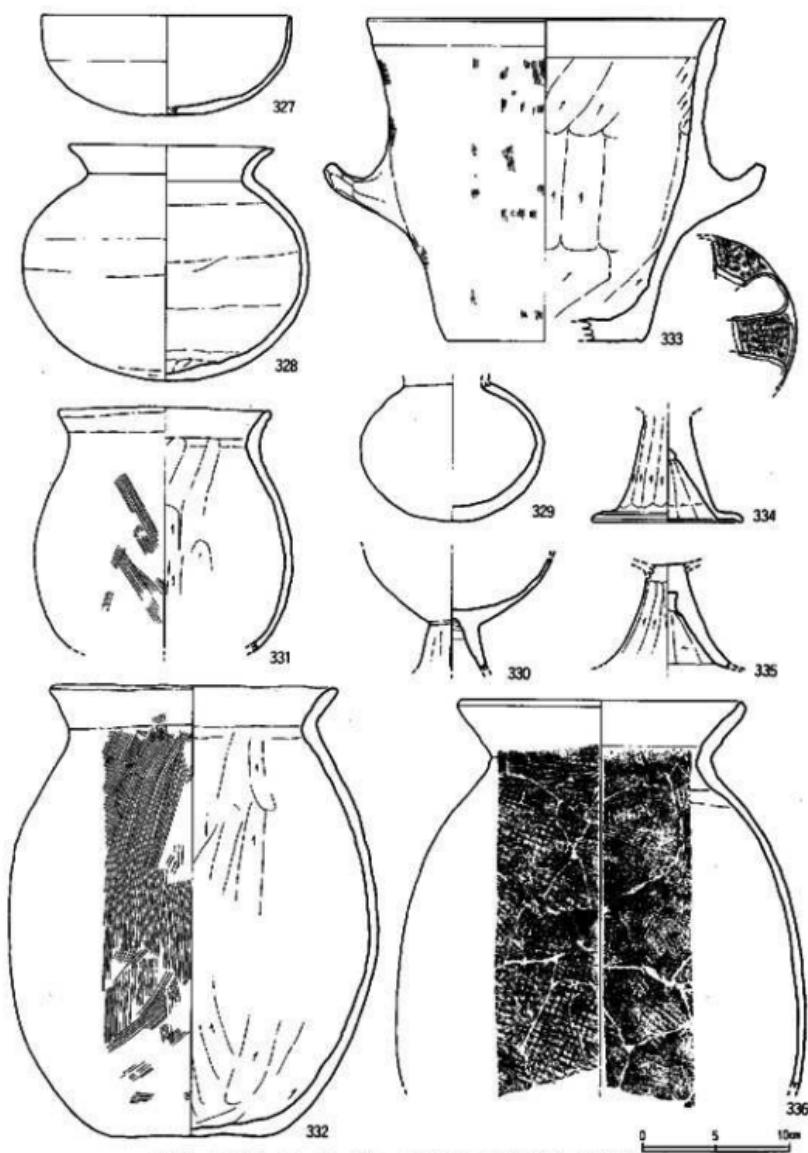


Fig.49 SD89 IV・V・VI区・確認面出土遺物実測図(4)(1/4)

返りがある。坏身には266のように高台の無いものとハの字状に広がる高台を持つタイプが出土している。263・264・269は検出時（上層）、265・267・268はIII区、266はI区からそれぞれ出土している。270・271は短脚の高坏である。270はIII区下層、271は検出時出土。272～274は蓋である。272は上面に手持ちヘラ削りが施され時期的に古い。混入品か。III区下層出土。273はII区中層下、274はI区中層出土である。275・276は小型の須恵器壺である。275は外面にタタキとカキ目が施される。II区中層下出土。276は短頸で、III区中層上出土。Fig.44は須恵器の大型器台、甕、横瓶である。277は口径39.4cmで、外面には沈線と櫛描波状文を施す。下半は平行タタキで内面に当具痕が残る。278は頸部に櫛描波状文を施す壺である。ともにI区最下層出土で時期的に古い。混入品であろう。279はIII区上層出土の甕である。暗青灰色を呈し、外面は平行タタキで内面には同心円文が残る。280はIII区上層から出土した横瓶である。焼きが軟質でやや黄色味を帯びた淡灰色を呈する。口径12cm、胴径26.3cm～33.7cm、器高29.9cmを測る。281はI区中層出土の横瓶である。口縁部を欠失するが破片はII区中層のものと接合する。胴径は27.3cm～34.3cm以上、外面は明るい青灰色を呈し、胎土に3mm前後の石英砂粒をやや多く含む。外面は平行タタキにカキ目、内面には丸石状の当具痕が残る。Fig.45は土師器及び石器・土製品である。282～284は甕である。282はI区中層出土で、口径12cm、器高5cmを測る。外面は赤茶褐色を呈し、胎土は精良である。内面にヘラ磨きが認められる。283もI区中層出土であるが、厚手で粗雑な作りである。胎土はやや粗く、茶褐色を呈する。284はII区上層出土。口径15.2cmで茶褐色を呈し、胎土は精良である。285はI区中層出土の高坏の坏部で、口径13cmを測る。明茶褐色で胎土は精良である。286は須恵器の製作手法を用いた土師質の甕である。口径11.2cm、器高13.2cmを測る。内外面とも茶褐色で、II区中層下出土。287は瓶、288は蓋か。287はII区中層下出土。口径22cmで、胎土に2～5mm大の石英・長石砂・雲母粒を多く含む。茶褐色を呈し、外面は刷毛目、内面はヘラ削りが施される。外面にはカーボンが付着する。288は口径38.6cmの大型である。2～5mm大の石英・長石粒をやや多く含む。茶褐色を呈し、刷毛目、ヘラ削りがみられる。III区上層出土。289・290はカマドである。289が前面左側の窓の部分、290が右側の窓及び口縁部である。両者とも明黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。III区及びIV区上層から出土している。291はIII区中層から出土した石庖丁である。小豆色の輝緑凝灰岩製。弥生時代遺物の混入品である。292は手捏のミニチュア鉢である。III区上層出土。指頭痕が残る。

Fig.46～49は、IV～VI区を中心に出土した遺物である。Fig.46は須恵器坏蓋・坏身である。293～296は坏蓋である。293はIV区中層下から出土したもので、混入品であろう。口径14cm、器高3.3cmで胎土は精良、焼成も良好である。青灰色を呈し、口縁内側には段を有する。天井部のヘラ削りは1%に近い、294～296は口径11.6～12.4cm、器高3.3～3.8cmを測る。天井部のヘラ削りは1%である。294はVI区中層下、295はIV区中層、296はIV区下層から出土している。297～300は坏身で、口縁の立ち上がりは短く内傾する。底部のヘラ削りは1%程度である。口径12.5～13.9

cm、器高3.3~4.1cmを測る。297はVI区上層、298はIV区下層、299・300はV区中層からそれぞれ出土。301~308はさらに口径が小さくなり、立ち上がりも低くなる。回転ヘラ削りは底面のみかそれ以下になる。口径11.6~12.8cm、器高2.7~3.8cmである。301~303・308はV区中層、304・305はIV区下層、306がIV区中層、307がV区下層からそれぞれ出土している。Fig.47も須恵器である。309・310は鉢形の器形で、共にIV区中層上から出土。309は口径20cm、器高4.5cmを測る。外面灰褐色で焼成がやや軟質である。310は口径31cm、器高8.1cm、底径23.2cmである。青灰色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成は良好である。311~313は甌である。311は胸径8.7cm、312は扁球形の胸部で径11.3cm、313は胴径8.6cmを測る。313には胸部にカキ目と櫛齒文が施される。311・313がIV区上層、312はIV区下層出土。314は小型の壺肩部、315は脚付の壺脚部である。316・317は小型の壺で、316は口縁部を欠失する。317は口縁部を欠失するが、頸部で擦り磨いて擬似口縁を作出する。口径10cm、器高15.7cm、胸径20.5cmで外面は灰色を呈し、焼成はやや軟質である。314はVI区、315はV区中層下、316はIV区下層、317はIV区中層下出土。318はVI区上層出土の平瓶である。胸径15.1cm、胎土に3~4mmの石英・長石砂を含む。焼成は良くなく、淡灰色を呈している。319はIV区下層出土の横瓶である。長径36.3cm、胎土2~3mmの大粒英砂粒を多く含み、外面とも淡青灰色を呈する。Fig.48は須恵器及び石器、土製品である。320は提瓶でVI区中層上出土。口径7.8~8.8cm、胸部径25cm、厚さ22cm、器高28.4cmで丸味のある器体を有する。外面は擬格子タタキにカキ目が施される。青灰色を呈し、胎土は精良で焼成も良い。321はVI区中層上で出土した大甌である。口径22cm、胸径43cm、器高46cmを測る。胎土は精良で淡青灰色を呈する。322はV区下層、323はV区中層出土の甌である。324は混入した円筒埴輪である。325は砂岩製の砥石でV区から出土。326はVI区上層から出土したミニチュアの鉢である。Fig.49は土師器を中心としたものである。327は壺でVI区中層下から出土、淡黄褐色を呈し、胎土は精良である。口径17cm、器高6.8cm。328はV区中層、329はIV区中層から出土した甌である。330~334・335はV区中層出土の高杯である。331~332はVI区中層出土の甌で、332は口径19.7cm、器高30.8cm、底径12cmを測る。褐色~黒褐色を呈し、胎土は比較的精良、焼成も良好である。333は上面から出土した壺で、底面に編カゴの圧痕がある。336は、タタキ調整を施す甌である。赤褐色を呈し、外面は擬格子タタキ、内面には当具痕が残る。以上、SD89の出土遺物をみてきたが、溝の掘削時期は7世紀前半代と考えられ、後半代まで機能していたものとみられる。7世紀末から8世紀初頭にかけては既に施絶していたと推察される。

那珂23次調査では古瓦類がまとまって出土している。パンケース10箱以上である。その中でもSD89からの出土が多かったので、他地点出土の瓦も含めて、この頁で説明しておきたい。

Fig.50はSD89出土の丸瓦である。全て上層もしくは中層上で出土している。SD89ではこの上層のグループと中層下で出土するグループがある。

337は残存長33cm、広端幅18.6cm、高さ7.4cmを測る。淡い明黄褐色を呈し、胎土は精良、焼

成はやや軟質である。外面はナデ、内面は布目と細かな竹状模骨痕が観察される。両側縁はヘラで面取りを行なう。II区出土。338は精良な胎土で赤褐色を呈する。外面は平行タタキの後ナデ調整を行ない、内面には337と同様幅0.6cmの竹状模骨痕がみられる。内面側縁はヘラ削り。III区出土。339も竹状模骨痕のみられる丸瓦片である。端部はヘラ削りが施される。I区出土。340も同様の丸瓦で、残存長33.5cm、広端幅15.2cm、高さ7.9cmである。外面はナデ、内面には布目と幅0.7~0.9cmの竹状模骨痕が観察される。赤褐色を呈し、胎土は精良である。IV区中層上出土。341はII区出土で、内面に水切り状の溝と布目痕がみられる。灰色で、胎土は精良、焼成は軟質である。342は前者同様II区出土で、外面に三ヶ月形の当具痕、内面に布目と幅0.8cmの竹状模骨痕が残る。Fig. 51は平瓦及び初期瓦である。343はIV区上層出土の平瓦である。赤褐色を呈し胎土は精良である。上面は布目と幅3cmの模骨痕、下面是刷毛後ナデの痕跡が残る。側縁はヘラ削り、前面には圓線を入れる。瓦当として、重圓の単弁八弁軒丸瓦と組み合わさる事が考えられる。344は下面が工具によるナデ、345~351は木目直交を中心とする平行タタキである。上面には全て桶巻作りの模骨痕が残る。352は前面に圓線を持つ。344・345・347はII区上層、346はV区中層上、348はIII区中層上、349は上層確認面、350はIV区中層上、351はIII区中層、352はI区上層からそれぞれ出土している。

353は無文瓦当を持つ神ノ前タイプの軒丸瓦である。III区中層下から出土している。内外面ナデ調整で瓦当周縁はヘラ削りを行なう。色調は灰色を呈し、胎土は精良、焼成はやや軟質である。溝下部で出土したことは重要である。354はS D 44 203区部分の弥生溝上部の包含層から出土した無文瓦当を持つ軒丸瓦である。牛頭神ノ前窯址の軒丸瓦と同じタイプの瓦である。残存長21cm、最大幅14.3cm、最大高7.8cmを測る。灰色を呈し、胎土は精良、焼成も良好である。外面は平行タタキ、カキ目の後ナデ調整を行ない、先端部にはヘラ削りを加える。内面は粘土紐巻上げの棗が残り、横ナデ、指おさえ、最終的には縦ナデを行なう。両側にはヘラ削りを加えて薄く仕上げる。瓦当は粘土板貼付で無文。体部上面に焼成前の穿孔を施す。355・358はV区下層出土で、355には木目直交平行タタキを持つ。356・357・359は神ノ前タイプの平瓦である。356はS C 07に混入、357・359はVI区上層出土。下面には平行タタキを施し、端部は丸く整形する。360は牛頭月ノ浦空跡出土の軒丸瓦と同じタイプの瓦である。包含層出土。瓦当径14.4cm、内区径10.2cm、頸幅3.6cmを測る。色調は灰白色を呈し、胎土は精良である。単弁八弁のネガティイブ蓮弁で、長さ4.4×1.9cmの菱形、間弁は漏斗状を呈する。蓮弁は月ノ浦出土品と細部まで一致し、同範の可能性が高い。

今回出土した古瓦は、時期的には2時期に分けられる。中層下～下層出土のものは神ノ前タイプが中心で、包含層出土の月ノ浦タイプもほぼ同じ時期と考えられる。伴出する須恵器から7世紀前半代と考えておきたい。上層出土のグループは、7世紀後半代から末の時期であろう。

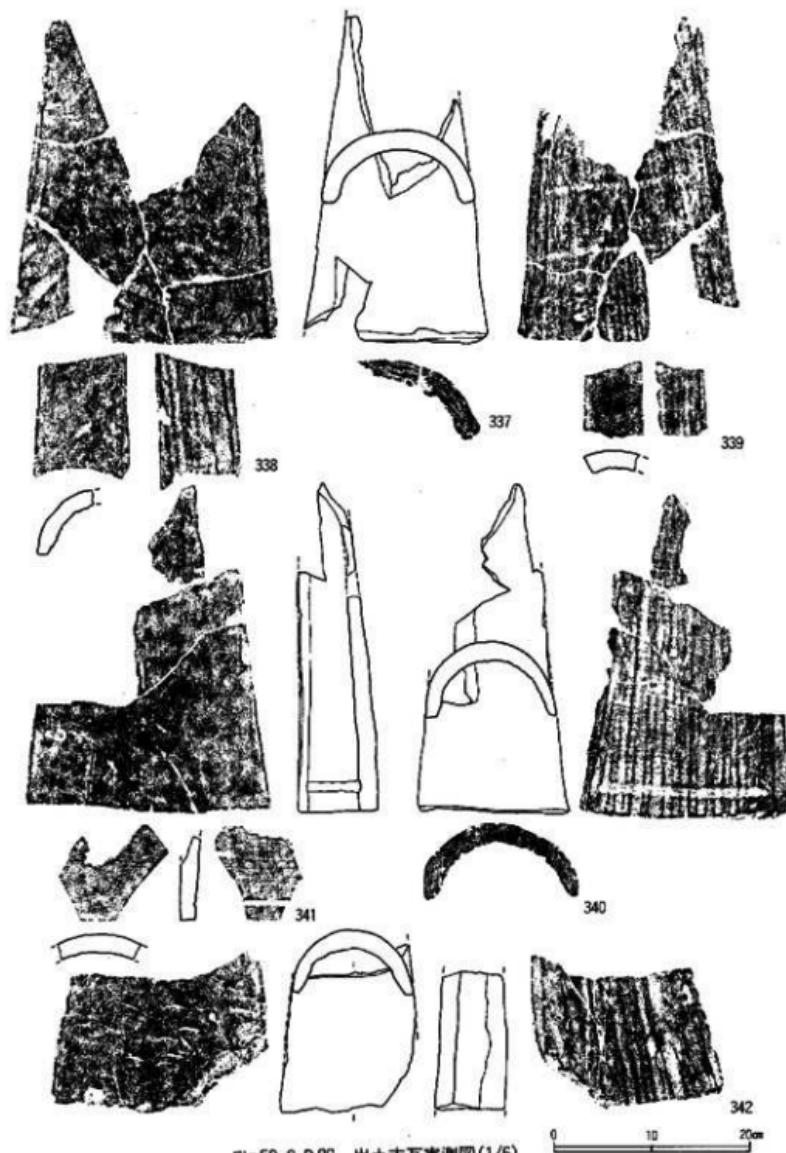


Fig.50 S D 89 出土古瓦实测图(1/6)

0 10 20cm

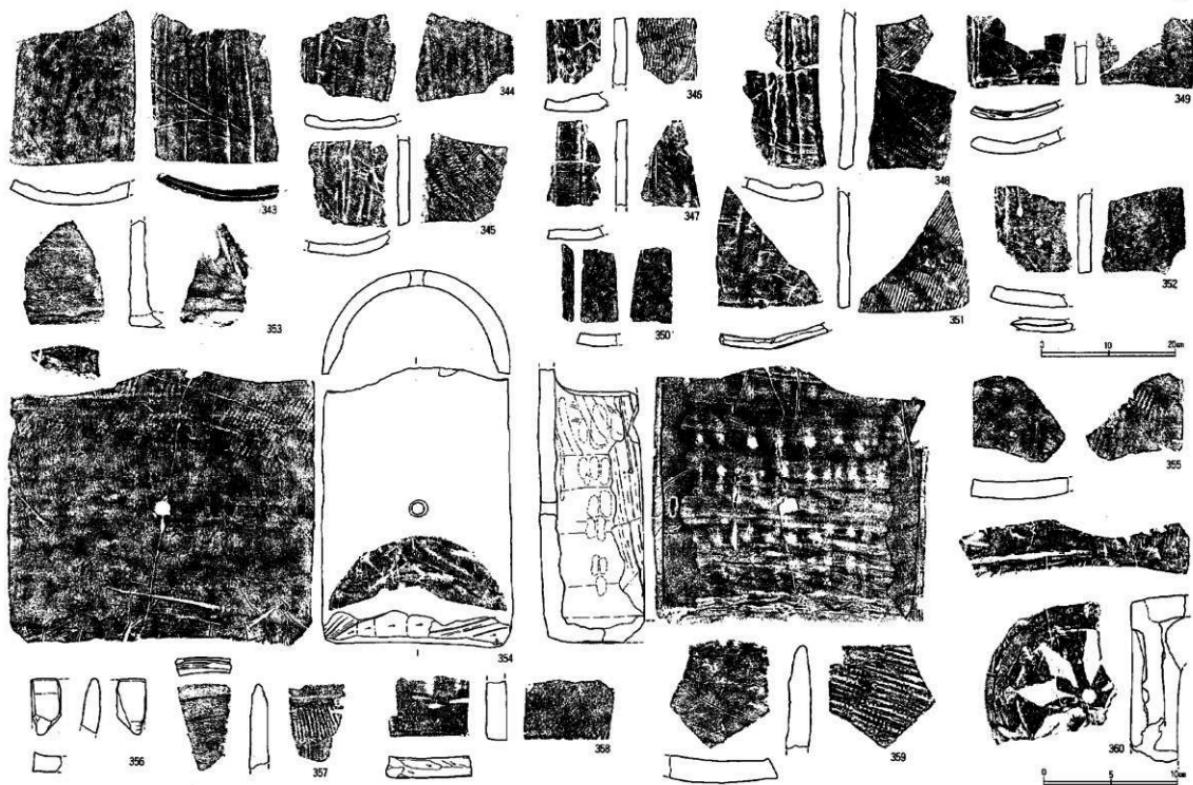


Fig.51 SD44-89 出土古瓦夷測圖(1/3·1/6)

II おわりに

今回の報告は、前回第254集で報告できなかった弥生時代の遺構群（竪穴住居址・掘立柱建物・土壙・井戸・大溝）と古墳時代終末の遺構群（掘立柱建物・溝）を中心としたものである。これらの遺構群から出土した遺物は膨大で、基本的な資料はできるだけ図化に努めたが、報告においては充分意を尽くすことができなかつた。今後何らかの機会に補足できればと思っている。

弥生時代の遺構群は調査区全面にわたって検出された。もともと遺跡の立地する微地形は、台地の西側縁辺部にあたり、北側と南側には浅い谷が入る地勢で、舌状に延びた台地部に相当する。S D44は南側を限る大溝である。北東方向から南西に向って延び、さらに西側へカーブする。この溝は東側200mの第20次調査地点でも確認しており、那珂台地を囲む環濠のひとつと考えられる。S D44は出土遺物から弥生中期末の時期が中心となる。同時期の遺構群が北側に重複なく展開する。S B57は5間×6間以上の大形掘立柱建物である。建物の性格ははっきりしないが同時期の核的な建物であったことは間違いかろう。全く同じ建物が東方2kmの席田遺跡群久保岡遺跡で調査されている。S C06・07・21は大形建物と方向を揃える竪穴住居址である。S B104も方向を揃える1間×2間の掘立柱建物である。調査区西側には土壙群が分布する。S K66・72・73は方向を揃え群集する。S B102・123は柱間隔の長い掘立柱建物である。S B102は123の建替であろう。S D44と方向を揃え、溝と関係の深い建物であることが推察される。なお、時期的には古いが調査区北端部で弥生前期末から中期初めの袋状竪穴群（S K19・120・126）の分布を確認したのは新たな知見であった。

ところで、環濠と考えられるS D44からは多量の遺物が出土している。上層の弥生後期の遺物は流れ込みで量は極端に少なかった。中層の遺物は中期末を中心とする土器群で、一括して投棄された状態で出土している。A群からD群まで確認され、203区外耕工事に伴う調査で出土した土器も1群を成す。丹塗り土器が多く含まれ祭祀行為に使用されたものであろう。各群の土器は筒形器台1点に広口・無頸・短頸・長頸・直口・小形・袋状口縁・瓢形の壺、鋤先状・く字状口縁の壺、鉢、蓋、高杯、器台、支脚、ミニチュア土器、土製品などが組み合わさる。点数や器種はグループによって多寡がある。集落遺跡での筒形器台の出土は極めて珍しいが、第20次調査でも環濠内で2点出土している。ここで注意しておきたいのは、各群の祭祀土器の組み合わせが豪奢墓地にみられる墓地祭祀の組み合わせとよく類似していることである。環濠は防禦の為の溝である。その防禦の溝に墓地祭祀と同じ祭祀土器を投入するのは、祭祀の内容が類似していた可能性がある。墓地祭祀は死んだ人、つまり祖靈が対象となるものであろう。その祖靈祭祀を集落内でも行ない、祖靈の加護による防禦を願ったものではなかろうか。環濠は削平を受ける前はもっと大きな溝であったはずであり、土壙なども築かれ極めて堅固なもので

あったろうと考えられる。それに加え、“祖靈の守り”という精神的な依りどころによって集落内の安寧を願ったものであろう。祭祀土器が環濠内に投棄されるのはその為ではないかと考えられる。D群出土の直口壺は井戸祭祀によく使用されるものである。この壺の口縁部にヘラ書きされた鳥は足の長い水鳥ではない。先祖の御靈を運ぶ鳥であろう。C群出土の棹頭形の土製品は莊嚴具のひとつかも知れない。

次に古墳時代終末の掘立柱建物と溝についてみてみたい。調査区中央部南寄りにN78°Eに方向を捕える梁行3間、桁行4間の掘立柱建物が3棟並んで検出された。かなり削平を受けていたが東柱が確認でき、純柱の建物であることが確認できた。梁行総長4.8m、桁行総長6.3mで、桁行に10cm前後の誤差はあるが、殆ど同一規模である。3棟は桁を揃えて一直線に配置されること、柱穴の規模や深さが同じであること、柱痕の径や埋土の状況が同一であること、出土遺物の時期がほぼ同じであることから同時存在の可能性が極めて高い。建物間の間隔も狭いことからこの3棟は桁を繋げたひとつの建物（倉庫）であることが考えられる。3棟を繋げた総延長は23mを測る。時期は柱穴出土の須恵器坏から考えると、古く見積もってIVa期、新しく考えればIVb期となり、7世紀初めから前半代ということになる。柱穴出土の須恵器はIIb期からIIIb期にかけてのものが多かったが、これは同期の堅穴住居を切って造営されているためで、最も新しい遺物で時期を決定した。また、これらの建物と有機的な関連を持つと考えられる溝群がある。SD64は建物と同じ方向をとる幅0.5m前後の浅い溝である。7世紀後半代の短脚の高坏が出土している。SD89は真北をとる幅2.1mの大溝である。SB87の東端から溝中央部までの距離は丁度15mである。溝の時期は、下層で古いものを混入していたが、須恵IVa期が安定して出土しており、IVb期まで連続する。7世紀初めから前半代に属すると考えられる。溝北側では下層にIVb期の須恵器が出土しているが、溝底が0.3m程高くなつており南側の中層下部に相当すると考えられる。SD89は建物群とは方向が少しづれているが、同時存在の区画溝であろう。SD92もSD89に併設された幅0.5m前後の浅い溝である。2m前後の間隔を持ち、7世紀末までの遺物が出土している。

SD89出土の遺物で注目されるものは古瓦類がある。下層出土のものは牛頭窓跡群神ノ前窓跡出土の瓦と同じ軒丸瓦・平瓦である。同タイプの瓦は中世に削平された包含層からも出土しており、合わせて月ノ浦タイプの軒丸瓦も出土している。牛頭窓跡群で焼かれた初期瓦の供給先のひとつが明らかになった事は興味深い。上層出土の瓦は丸瓦と平瓦が中心である。軒丸瓦は検出できなかった。重層の単弁八弁の軒丸瓦と組み合わさるとみられる。SD89の上層は7世紀後半から末の時期であり、瓦も同じ時期に属すると考えられる。

最近、那珂・比恵遺跡で、大型の建物や倉庫群の発見が目立っている。これらは径700m以内に含まれ、規模や時期的な問題など関連することが多い。今後、全体的な面からの検討が必要であろう。

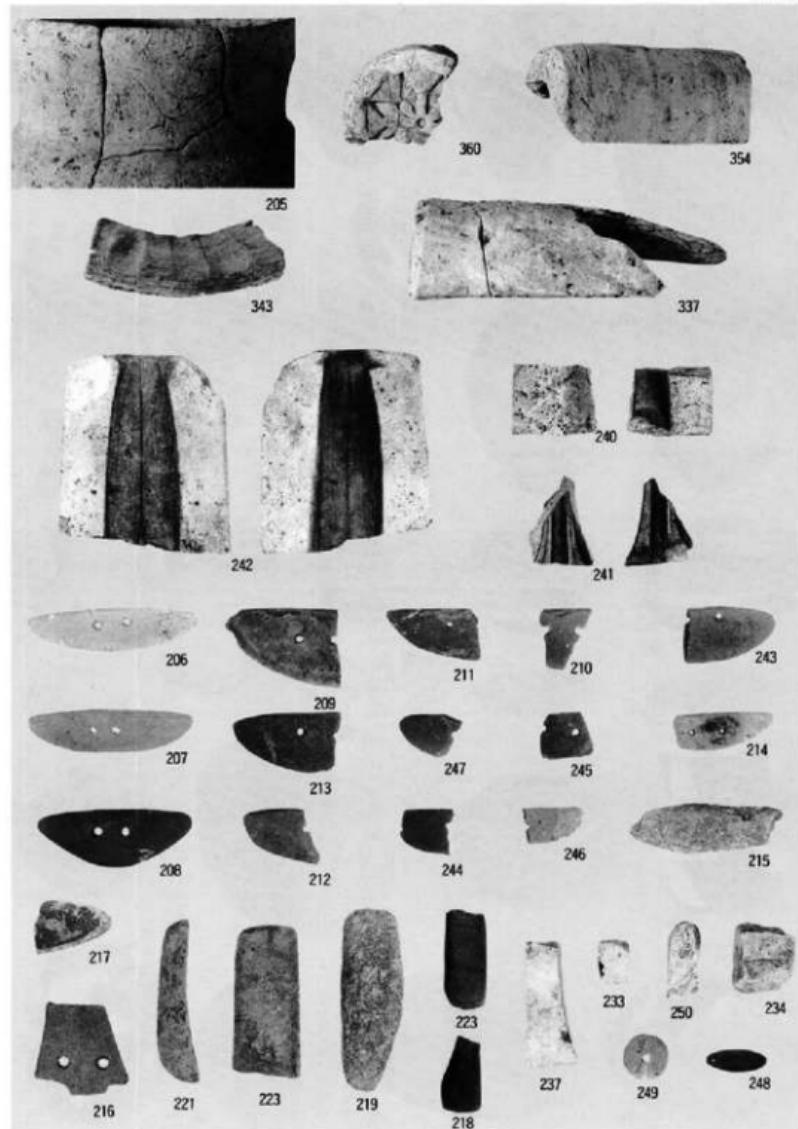


SD44 出土遺物

PL.2



SD44 出土遺物



SD44 • SD89 • SP群 出土遺物



那珂遺跡4

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第290集

平成4（1992）年3月13日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8-1
(092)711-4667

印刷 荣光印刷株式会社
福岡市東区松田一丁目9-30
(092)611-3838

